



中山修一著作集24 : 残思余考——隠者の風花余情 (上)

中山, 修一

(Issue Date)

2024-12-02

(Resource Type)

book

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493117>



中山修一著作集 2 4

残思余考——隠者の風花余情（上）

はじめに——著作集 24 の公開に際して

ここに公開する著作集 24 『残思余考——隠者の風花余情（上）』は、いわば著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』の続編に相当するもので、次の三つのパートによって構成されています。

第一部 山野に生きる（日記編）

第二部 火の国不死鳥（俳句編）

第三部 白雲に夢想す（短歌編）

隠者のごとき現在の私の暮らしは、人里離れた阿蘇南郷谷の山中、風花漂うなか、モリスに遊び、憲吉を書き、一枝を論じ、さらには逸枝や道子といった火の国の女たちに興じる研究と、食事をつくり、庭いじりをし、温泉を楽しみ、加えて野生の動植物に歓喜する生活とが両輪となって成り立っており、過ぎ行く時間の合間にあって、かかる研究と生活にまつわる雑多な余念が、途切れることなく、頭のなかを行き交っています。著作集 22 と 23 の『残思余考——わがデザイン史論』が研究の側面を扱うものであるとするならば、続くこの著作集 24 と 25 の『残思余考——隠者の風花余情』は、生活面を彩る流浪の情感を率直に書き残すものです。

第一部「山野に生きる（日記編）」は、普段の森の暮らしを短く描写した日記文を集めたものです。第二部「火の国不死鳥（俳句編）」と第三部「白雲に夢想す（短歌編）」は、俳句と短歌の形式を借りた創作文です。どれも、一年ごとの編集となっています。いよいよこれよりのち、筆が尽きるまで、自身の生活と暮らしにかかわる一片一個の思いを拾い上げ、それを文にし続けたいと思います。

最後に、この巻のタイトルに用いました「残思余考」という用語につきまして書き記します。著作集 1 から著作集 15 までは「中山修一著作集」の正編とするならば、著作集 16 以降の各巻は、その続編に相当します。つまりこれらの巻は、正編を受けての「残余の思考」という連続する流れに沿った副産物として成り立っているのです。こうした事情を背景として、「残余」と「思考」のふたつの単語が合成され、「残思余考」という独自の複合的造語が新たにここに誕生したのでした。この用語を第 22 巻から第 26 巻までの著作集最後の五つの巻に適用いたします。

二〇二四年一月二日

師走に入ったいま、南阿蘇の森のなかの寓居にて
中山修一

著者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上の中泊生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との統合により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザインの歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft*（Berg Publishers, Oxford）が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年、鹿島美術財団出版援助図書）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシェル・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。

中山修一著作集 2 4

残思余考——隠者の風花余情（上）

第一部

山野に生きる（日記編）

2026 年 3 月

著作集 24 『残思余考——隠者の風花余情（上）』

第一部 山野に生きる（日記編）

目 次

中山修一著作集 24

残思余考——隠者の風花余情（上）

第一部

山野に生きる（日記編）

目 次

序に代えて	三
第一編 二〇二四（令和六）年——晩年生活後半の再出発を誓う	四
第二編 二〇二五（令和七）年——喜寿を生きる	二三
第三編 二〇二六（令和八）年——これもよし、それもまたよし	四四

序に代えて

この、著作集 24 『残思余考——隠者の風花余情（上）』の第一部「山野に生きる（日記編）」は、著作集 13 『南阿蘇白雲夢想』の第二部「南阿蘇の庵にて（日誌集）」を継承するもので、現在、「目次」にもありますように、以下の三つの編から構成されています。

第一編 二〇二四（令和六）年——晩年生活後半の再出発を誓う

第二編 二〇二五（令和七）年——喜寿を生きる

第三編 二〇二六（令和八）年——これもよし、それもまたよし

小学校に入学した最初の夏休み、絵日記を書くことが宿題に出されました。それが、何か私におもしろく感じられ、結局、卒業するまで、日々日記をつけるようになりました。そうした習慣が、半世紀が過ぎたいま蘇り、自分も少し書いてみようという気持ちになりました。この第一部「山野に生きる（日記編）」は、私にとりましての、いわば近年の「心象風景の雑記」です。大事な残像が遠ざかる前に、したためておきたいと思います。さらに今後も続きます。

（二〇二六年初春）

第一編 二〇二四（令和六）年——晩年生活後半の再出発を誓う

一．再出発元年

昨年は、私にとりまして大きな節目の年となりました。

神戸大学を定年退職してから、三月末でちょうど一〇年の歳月が流れました。神戸大学で勤務していたことも、もはや過去の記憶の一片になろうとしています。

九月、町役場の駐車場で転倒し、救急車で運ばれ一箇月弱の入院生活を送りました。右足の膝の骨にヒビが入り、二本のピンとワイヤーで固定する手術でした。

一二月、七五歳の誕生日を迎え、後期高齢者の仲間入りをしました。役場から新しい保険証が届いたとき、何か急に老人になったような気にさせられました。

誕生日から四日後、母親を見送りました。通夜と葬儀は、菩提寺の蓮政寺で行ないました。二年前に父親を亡くし、いまふたりの遺骨は、わが家の納骨堂に並べられて眠っています。

昨年从去年から、ウェブサイトで公開しています「中山修一著作集」（全一五巻）を全二四巻に組み替える作業を行なっています。今後、残された日々にあって一卷一卷を完結してゆきたいと思います。

このように去年は、健康、年齢、家族、研究のすべての面で転換期となりました。今年は、再出発元年です。決意も新たに、晩年生活後半へと向かいます。（一月）

二．雪に包まれた「ぽつんと一軒家」

今季最初の雪は、先月の二二日に降りました。庭もウッドデッキも、一瞬にして一面銀世界に変わりました。数センチの積雪でした。ところが、幸いなことに、二日間の家ごもりですますことができました。といいますのも、そのあと暖かい雨が降り始め、それにより、積もっていた雪が一気に消え、坂道の凍結も免れたためです。今年の冬は暖冬との予報が出ていましたが、そのとおりになりました。

年が明けました。予報で大雪になることがわかっていましたので、二三日の午前中に買い出しをし、しばらく行けなくなることを予想して、温泉にも行き、正午ごろに帰宅しました。すると予報どおりに、雪が舞い始め、翌日の午前中まで続きました。昨年の雪と違って、今回は一〇センチを大きく超える積雪になりました。降雪が一段落した午後、郵便局から電話があり、配達をしばらく控えたいとの連絡でした。大雪で自宅へ通じる坂道が上がれなくなっているようです。前にもこうした経験はあり、まさしく下界との関係を断つ、本格的な家ごもりを覚悟せざるを得ない一報でした。

食料も十分にあり、暖もとれ、室内生活に支障はありません。窓から雪景色を楽しむ毎日です。積雪と凍結から解放されるまでの結局五日間にわたる家ごもりになりました。おおかた雪が融けた週明けの二九日の朝、郵便局から電話があり、これから届けるとのことでした。開口一番、「遅くなって、申しわけありませんでした。ここは、ぽつんと一軒家ですからね」。これには、返す言葉もなく、笑って応えました。（一月）

三．寒中見舞いを書く

年末に母を亡くしたので、年賀状を出すのを控えていました。忌明けを迎え、いただいた年賀状の返信に、寒中見舞いを書きました。以下がその文です。

寒中お見舞い申し上げます

梅の季節を迎えようとしています。いまだ冬の寒さが厳しいおり、お変わりなくご健勝にてお過ごしのことと拝察いたします。

喪中につき、年頭のごあいさつを控えさせていただきましたが、穏やかなお正月をお迎えになったことに思いを寄せて、本年のさらなるご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

私事になりますが、昨年一二月六日、入院加療中でありました母中山マル子が、九六歳の生涯に幕を閉じ、過日、熊本市内にあります菩提寺の蓮政寺に、滞りなく納骨いたしました。生前にいただきましたご厚情に衷心より感謝申し上げ、ここに謹んでご報告させていただきます。

二〇二四（令和六）年 立春を前にして

こうして新年あいさつと母の死亡についての報告を、日ごろ交流のある方々にしました。母が亡くなって、そろそろ二箇月になろうとしています。（一月）

四．確定申告の季節

神戸で働いていたころ、独身時代に購入したワンルーム・マンションを売却するまでのあいだ、人に貸しはじめたときをきっかけとして、確定申告をするようになりました。最初の数年間は要領がわからず事前に税務署に足を運び、一つひとつ記入の仕方を教えてもらっていましたが、その後は、自分ひとりで作成ができるようになり、税務署に行くこともなく、おおかた郵送ですませるようになりました。そうしたことがしばらく続き、その部屋を売却したあとも、いまに至るまでこの時期になると確定申告書が送られてきます。もはや年金以外に収入はなく、確定申告の必要はないのですが、頭の体操だと思って申告書をつくってみます。そうすると、地震保険や寄付、年によっては医療費などの控除があるために、いくらか還付されてきます。これが、毎年この時期の楽しみとなっていました。

ところが今年は、事情が大きく違いました。といいますのも、昨年、遺言により父から譲渡を受けていた実家を売却したため、それに対する所得税を支払うことになったのです。書類のつくり方がわからず、予約のうえ税務署に相談に行きました。担当の方はとても親切で、私の持参した書類を見ながら、必要な申告書（いわゆる第三表）のほとんどを自分の赤ペンで記入してくれました。

いつものように、その時期が来ると、確定申告書（第一表と第二表）が送られてきました。この部分はいつもこれまで自分でつくっていましたので、ある程度問題なく記入が進み、最後の所で第三表にある納税額を転記し足し合わせることによって、何とか書類作成が終了しました。いよいよ確定申告がはじまりました。私は、それら必要な用紙をもって税務署に行き、係の人にチェックしてもらいました。ひとつの間違いもなく、無事、受け付けてもら

い、控えの用紙に受付印を捺してもらおうと、その足で銀行に行き、納税額を振り込み、こうして今年の私の確定申告は終わりました。

譲渡所得に関する申告書の作成ははじめてでしたので、なかなかうまく進まず、いらいることも多かったのですが、税理士の方に依頼することなく、自力で無事終了したことに、いま安堵しています。（二月）

五. 「国民は増税、議員は脱税」の世論

私が確定申告した前後の時期から、「国民は増税、議員は脱税」という言葉が生まれ、世論を盛り立てました。国民にとって、今後、防衛費、社会保障費、子育て支援経費などに関する増税が待っているようです。一方それに対して、自民党派閥の政治資金パーティーでの販売ノルマを超えたお金が所属する各議員に還流され、どうもそのお金が政治活動資金収支報告書に不記載のまま、裏金となって流用され、この分への税務申告がなされていなかったようです。政治活動費は、原則非課税とのことですが、私的に使用したお金や、使い残した部分については所得とみなされ、課税の対象になります。ところが、おおかたの議員が申告を怠り、納税の義務を果たしていないことが判明したのです。「国民は増税、議員は脱税」というキャッチ・コピーは、こうした背景から生まれました。

この裏金が所得とみなされる性格のものであれば、当然ながら、確定申告が必要となるでしょう。日本国憲法第三十条は「国民は、法律の定めるところにより、納税の義務を負う」と定めているからです。ところがこのお金について、こともあろうに財務大臣が、「納税するかどうかは各議員の判断による」といった趣旨の答弁を国会で行ない、まっとうな国民の納税感情をいっきに逆撫でしてしまったのです。どうやら国会議員には納税の義務は、免除されているように聞こえてきます。

このことはゆゆしき問題だと思います。しかし、それ以上に問題なのは、この裏金の使途が明らかにされていないことです。過去五年間で、ひとつの派閥としては数億円、ひとりの議員として数百万円から数千万円とも伝えられています。このお金は何に使われたのでしょうか。裏金ですので、法に触れる可能性のある裏の政治活動や選挙運動などに使われたにちがいありません。したがって、領収書もないでしょうし、確定申告など論外なのです。であるならば、この国の政体は、裏金による裏活動が横行する闇政治によって成り立っていることになります。このような暗闇のなかから、明るい未来社会が描き出せるのでしょうか。政治と政治家がいま問われていると思います。（二月）

六. アリ（蟻）の大群襲来

この山奥で生活を開始してから一〇年が過ぎました。その間、都会生活では考えられないことが、幾つかありました。そのひとつが、屋内へのアリの侵入です。侵入場所のひとつは、台所の床に置いてあるごみ箱で、もうひとつは、書斎にある三枚引き戸の金属レールの、壁に面した端の部分です。

そこで、自分なりに、群れをなしてごみ箱に入ってくるアリ対策を考えました。これまでは、床に置いているごみ箱に、この地域専用の大きめのごみ袋を入れ、そこに直接ごみを入

れていたのですが、それをやめて、スーパーのレジで魚や肉の生鮮食品や豆腐やこんにゃくなどの水分を含んだ品物に入れるのに使用される小さなビニール袋を残しておき、キッチン台の上にだいたい一日に一袋を置いておいては、調理に出たごみを入れ、いっぱいになったところでしっかり封をし、ゴミ箱の大きいゴミ袋に入れるようにしてみました。これが功を奏し、それ以来、アリの襲来は止まりました。

次に書斎のアリ対策です。なぜレールの端部分の一点にアリが大挙して集まってくるのかはわかりません。何かアリが好む特別な匂いか味があるのでしょうか。はじめのうちは、粘着剤のついた紙シートのようなものを買ってきて、その場所に置いていたのですが、手間も暇もかかるので、掃除機を部屋の片隅に置いておき、アリが押し寄せてくれば、掃除機で強制的に吸い取る方法に代えてみました。数時間おきに数日はかかりますが、いつのまにか自然とアリの姿が消えてゆきます。

それでも、書斎へのアリの襲来は、毎年続いています。いつも決まって、寒さが緩む春のはじめの数日です。これまでの例ですと、三月か四月でした。ところが今年は、この現象が二月に起こりました。アリにとってはもう春なのでしょう。そういえば、この冬の降雪は、昨年の一二月と今年の一月でした。二月はもう暖くなり雪は降りませんでした。普段ですと一月と二月に訪れる積雪体験も、今年は一変しました。季節が前倒しされながら進んでいるのが実感されます。（二月）

七．荒廃する山野と人の恵み

私が住む家は、およそ三十余年前に別荘地用として開発された一区画に立っています。山を崩し整備されると、すぐにもすべての区画は完売しました。しかし家ができたのは九軒に止まり、いまではそのうちの五軒くらいしか利用されておらず、残りは未使用地、ないしは廃屋となっています。日常的に使用されている五軒のうち、私だけが定住者で、それ以外の人たちは、みな週末や季節を楽しみにやってくる外来者です。

この地にたどり着くには、約一キロの曲がりくねった、車一台が通る坂道を登らなければなりません。別荘地に隣接して牧野があり、かつてはトラックに載せて牛を運ぶ牧野道として、日々にぎやかな往来がありました。しかし、畜産業の衰退で牛を飼う農家が減ってゆき、いまや牧野には一頭の牛さえもいなくなってしまいました。また別荘地に立つ家も、所有者の高齢化と相続人の不在等により、一軒、また一軒と廃屋になっています。そのようなわけで、この牧野道は、生活道路としても、人影のまばらな単なる山道と化してしまったのです。

この山道は、途中の一〇〇メートルくらい、人工的に山のあいだを切り開いて造成した箇所があり、高さ五、六メートルののり面の地肌がむき出しになっています。当初はネットが張られていたのですが、次第にそれも切れ落ちてしまい、いまでは、年に一、二回、崩れた土砂が路面をふさぎ、倒れた木が電線に覆いかぶさるといった具合に、実に危険な道路になっています。それまで、牧野組合が、その管理に当たっていたのですが、その消滅が、そうした悪化した道路事情を加速させているのです。大きな崩落や倒木の場合は、町役場か電力会社に連絡し、対応をお願いすることになります。しかし、車が通れる程度の左右両脇の土砂の滞留や、小枝や葉っぱの散乱は、強い雨風のあとなどには避けがたく起こります。かつ

て牧野組合があった集落の人たちによる年に一度の清掃はありますが、牛がいなくなってしまういまにあっては、なかなか日常的には、そこまで手が回らないのが実情のようです。

そこでこの間、梅雨が終わった初夏の時期と、落葉がすんだ晩秋の時期の年に二回ほど、私自身、スコップと一輪車を出して、できる範囲での清掃をしていました。しかし、去年の九月、膝を骨折して以来、いまだ自由な歩行ができず、この道の土砂や枝葉の清掃は、できずじまいになっていました。するとどうでしょう。いつものように、家を出て車でこの道路の危険個所にさしかかると、何ひとつ路面に障害物がなく、道路幅もいつもより広く、完全にきれいになっているではありませんか。どなたからの恵みかわかりません。管理ができなくなって山野が荒れる一方で、こんなに温かい人間の施しがあることに、強くこころを打たれました。（三月）

八. なごり雪、または忘れ雪

いつものように温泉に向かっていたときです。春一番といえいいのでしょうか、強い風が吹いていました。すると、雪が降り出し、風の力を借りて、フロントガラスをたたきはじめました。ああ、これが今年のなごり雪なんだなあ、と思うころには、雪も止み、温泉に着きました。受付で、そのことを話すと、「ここからも見えていました。忘れ雪ですね」と、返してくれた。「忘れな草」や「忘れ霜」同様に、はじめて聞く「忘れ雪」も、いい語感で伝わってきました。そろそろ春が来るのでしょうか。（三月）

九. 一日のはじまりと年度のはじまり

目覚まし時計は使いませんが、ほぼ毎日、午前一時半ころに目が覚めます。するとベッドのなかで、この日のことに、思いを巡らせます。まずは仕事のことです。昨日書いた文を思い起こしながら、頭のなかでページをめくり、添削をします。修正点が見つかったら、いよいよエンジン始動です。次に、買い物や銀行、コインランドリーや役場、散歩や温泉など、外出の日は、街中での立ち寄り先の手順を確認します。そして最後に、この日の三食の献立が確定すれば、いよいよ体に力が注入され、ベッドから起き上がることになります。これが、私の一日のはじまりの定例儀式です。

明日、四月一日は、新しい年度のはじまりです。学校では新入生が、会社では新卒社員が集います。そのときの祝辞は、どのようなものになるのでしょうか。少子高齢化、気象変動、人口減少、分断差別、格差拡大——そうした状況のなかにあって、指導者は、どう明日の世界を語るのでしょうか。

私自身は、定年と同時に社会を離れ、新年度の祝辞とは縁遠くなりましたが、社会の衰退を表わす指標を目の前にして、何か若い人に励ましの言葉をと、思うのですが、なかなかいい言葉が、見当たりません。あえていえば、「適正」という言葉でしょうか。いまの社会を私は、「過大」「過剰」「過重」「過密」「過労」が支配する社会とみなしているのです、この言葉が、浮かんでくるのかもしれませんが。（三月）

一〇．「中山修一著作集」を全一五巻から全二四巻に更新

私は、定年退職と同時に、現役時代に書いた論文を集めて、ウェブサイト上に「中山修一著作集」を開設しました。最初は四巻からなる小さなものでした。しかし、時間とともに、構成する巻数が増えてゆき、一五巻に到達しました。まだこの一五巻は全巻が完成しているわけではありませんが、おいおい完結するでしょう。一方、幸いなことに私の体は、健康を維持しているのです。まだ書けます。もちろんいつまで書けるかわかりませんが、一五巻を超えてまだ書ける状態にあるのです。そこで増巻の計画に頭を巡らせました。書きたいこと、書けそうなことは、何と何か——。こうして、追加の九巻が確定しました。そこで今回、ウェブサイト「中山修一著作集」を一五巻から二四巻へと更新するに至ったわけです。二四巻のすべてが完結するには、およそあと一〇年の歳月を要する見込みです。そのとき八五歳になっています。果たしてこの計画は思いどおりにゆくでしょうか。一日五時間、絶やすことなく歩み続けるほかありません。これが、これまでの延長としての、これからの私の学究生活です。（四月）

一一．天草への日帰り旅行

私が住む南阿蘇の地域には、高校の同窓生でつくる阿蘇南部江原会という、会員二十数名の小さな団体があります。いつも四月に花見、一二月に忘年会を開いてきました。ところが今年の四月は、新しく趣向をこらし、〈A列車で行く「春の宴」in 天草〉と題して日帰りて天草に行くことになりました。会員やその同伴者を含め、一六名が参加しました。

そのなかの数名と私は、南阿蘇鉄道で大津まで行き、そこで豊肥本線に乗り換えて、待ち合わせ地点の熊本駅へ向かいました。八年前の熊本地震で被害を受けていた南阿蘇鉄道が全線開通したのは昨年夏のことで、私はこの日はじめて、この鉄道に乗りました。また、熊本駅から終着の三角駅までは、二両編成の特別仕立ての「A列車」に乗車しました。車内には、カウンター・バーもあってお酒も提供され、さらに、途中のひとつの駅では、三〇分くらい停車し、乗客はホームに出て、ジャズの生演奏を楽しむことができました。題目には、‘Take the A train’も含まれていました。こうして、思いがけない歓迎を受けることができました。

三角駅を出ると、すでに予約してあった小型バスが待っていました。全員それに乗り込むと、天草大橋の一号橋を渡りました。これは、最近新しく造営されたもので、古い橋と並行して走っていました。この新営橋を通過するのも、私にとって初体験となりました。橋を渡ってしばらくすると、お目当ての食事処に到着。ここでお昼の会食がはじまりました。提供されたのは、天草らしく、すべて新鮮な魚を用いた料理でした。そのなかに、「コノシロ」の仲間の「コハダ」と呼ばれる地元産の魚を使ったバッテラが含まれていました。バッテラというと、白板昆布を上に乗せたサバの押し型寿司を思い浮かべますが、この日食したのは、この店の自慢料理の一品で、薄くむいた大根でコハダをくるんだ巻きものでした。はじめて楽しむ食感でした。

食事が終わると、海に面した大型の温泉施設に行きました。ところが、そのすぐ近くに「天草四郎ミュージアム」があることに気づき、私ともうひとりは、みんなと別れて、このミュージアムに入りました。ちょうどいま、石牟礼道子さんの最後の作品である「沖宮」に

ついて書いているところで、これは、天草四郎と五歳の童女のあやとの道行きを主題とした新作能の台本です。実にタイミングよく天草四郎に出会うことができ、願ってもない収穫のひとつときとなりました。

そのあと一団と合流し、来た道を引き返して、三角西港を散策しました。ここは明治時代に西洋人技師の指導のもとに開発された港の跡で、幾つかの洋館も残っていました。ここで、記念の集合写真を撮ると、この日予定されていた行事はすべて終わり、再び三角駅から「A列車」に乗り込み、終着の熊本駅で解散となりました。

南阿蘇鉄道、A列車、天草五橋の新一号橋、コハダのバツテラ、天草四郎ミュージアム——私にとりまして、初物尽くしの旅でした。（四月）

一二．温暖化と人口減

阿蘇地方の名産に高菜漬けがあります。いまが新漬けの季節です。信州の野沢菜や広島の高島菜ほどに全国的に有名かどうかはわかりませんが、地元の食卓には欠かせない食材です。私の住む町に、明治初期に創業された味噌や醤油を扱う老舗があり、たまたまその四代目の、九〇歳になられる経営者の方とお話をする機会がありました。このお店では、高菜漬けも主力商品となっているものの、しかし昨年は、害虫によって高菜の生育が妨げられ、その結果、今年の生産量は減少し、収益がかなり落ち込んだとのことでした。害虫が発生したのは、おそらく温暖化の影響だろうということで、今後駆除剤を使用できるように、組合を通じて政府に働きかけを行なったと話されていました。

また、この経営者は、こんなことも話されていました。人手がほしくて募集の広告をするのだが、なかなか応募者に巡り会えない——。背後に、若者をはじめとする生産労働力の衰退があるようです。その方がおっしゃるには、数十年前に一万三千人だったこの町の人口は、すでに半数を割り込み、いまや五千人台に入ったと、嘆いておられました。

この小さな町においても、温暖化と人口減の影響は、日々大きくなっています。何か解決策はあるのでしょうか。（四月）

一三．研究者生活五〇年

私が神戸大学に就職したのは、一九七四年の四月でした。今年が二〇二四年です。引き算してみました。答えは五〇となりました。何ともいえない気持ちになりました。一見長そうに見えます。しかし、研究の成果は微々たるものです。大海に浮かぶ笹の葉のようでも、台地を歩むカタツムリのようでもあります。実に小さな存在です。それでも、笹の葉もカタツムリも、あるがままの力を出して、そこにいるのです。おそらく、大きいとも小さいとも、何も感じることなく——。私も、あるがままの力を出して、あと一〇年は、研究の日々を続けたいと思います。しかし、「あと一〇年」なんぞ思うところが、笹の葉にもカタツムリにもない、人間の浅ましさとあり、愚かさのように、感じてきました。これも、「あるがまま」でよいのではないのでしょうか。（五月）

一四．社会性が消えてゆく

この熊本県出身で女性史学の開拓者と称される人に高群逸枝さんがいます。彼女の自叙伝『火の国の女の日記』を読みますと、彼女は、東京武蔵野の一角にある、富士山が望める「森の家」と呼ばれる自宅の二階の書斎に、每日一〇時間こもって勉学に励んでいます。着ている服の片方の袖だけが日焼けして色が変わったとも述懐します。玄関には、「面会お断り」の札が掛けてありました。夫の憲三さんが、編集者として逸枝さんの仕事の指南役を務め、あらかた炊事洗濯も引き受けました。「森の家」で仕事をはじめて以来、こうしたふたりの日常が、逸枝さんが亡くなるまで、戦争を挟んでおよそ三〇年間続きました。

実におこがましい話題になりますが、逸枝さんと憲三さんのこうした学究生活をつい最近知った私も、少しそれに似た生活をしているのです。現役を離れて一一年間、いまでも山にこもり、執筆を続けています。夜中の一時過ぎに起きて朝食をとり、三時から八時までの五時間机に向かいます。八時から昼食、午前中に用をすませ、昼過ぎの二時に夕食を食べて、四時に就寝です。土日も祭日もなく毎日この生活です。母親が昨年末に亡くなって以来、定期的に熊本市内の施設や病院に通うこともなくなり、それ以来、山を下りて地元の町に出るのは、週に三回か四回となりました。町では、買い物や温泉、役場やクリーニングのときなどに、顔なじみの会計や受付や担当の方と言葉を交わす程度です。それ以外の午前中は、家や庭の片付けや掃除、洗車などをして過ごします。家では、新聞は購読せず、テレビもほとんど見ません。人や情報と交わらなくなって、自分の体内から社会性といったようなものがなくなってしまってゆくような気がしています。ときどき、逸枝さんや憲三さんがお元気であれば、そうしたことについて、聞いてみたいような気がするのですが、どんな答えが返ってくるのでしょうか。（五月）

一五．俳句と短歌

「中山修一著作集」を一五巻から二四巻に再編したとき、二三巻に『隠者の風花余情』を設け、その一部を、俳句と短歌を掲載するスペースとしました。毎週 NHK の E テレで、俳句の短歌の時間があり、前もってそれぞれの HP で兼題とテーマが発表されますので、それを確認して、毎週、三つの句をつくり、三つの歌を詠むことにしています。

この年齢になりますと、いまの心境というよりも、過去の思い出が、どうしても多く題材になります。たとえば、兼題が「電車」であれば、幼いときに見た、電飾に光り輝く花電車が、テーマが「名残」であれば、かつて経験した大事な人との別れが、すぐにも素材として頭に浮かびます。私はそれを、日常的に書いている文のなかで見出した言葉たちとうまく練り合わせて作品にするわけですが、俳句の場合は、文字数が少ないので、たとえば、円の中心を目がけて投げるダーツのような感じがし、点による衝撃を楽しみます。一方、短歌の場合は、俳句に比べて字数が多いこともあって、たとえば、息を吹きかけて空に向かって飛ばす風船やシャボン玉のような感じがしていて、空間的な膨らみに触れることをおもしろがっています。どちらの場合も、私にとっては、心なり頭なりの奥底に眠る未現像のネガを取り出し、それを現像して写真にするような行為です。この場合、現像液が言葉の役割を果たします。なかなか、時を得た、場面にふさわしい言葉が見つかりません。また言葉はすでにあっても、そのつなぎ方に苦労します。それが魅力となって、私を惹きつけているのかもし

れません。愚作を承知で、また今週も、俳句をつくり、短歌を詠じたいと思います。（五月）

一六．消滅可能性自治体

先ほど「人口戦略会議」が発表した報告書によりますと、日本の全自治体の四割を超える七四四の自治体が「消滅可能性自治体」なのだそうです。「消滅可能性自治体」とは、二〇歳から三九歳の若年女性の人口が二〇一〇年からの三〇年間で五〇％以上減少する市町村とのことで、私が住む町も、減少値が五七％で、不名誉な「消滅可能性自治体」になりました。

地元の人に聞くと、五〇年くらい前は、この町の人口はおおよそ一万二千人だったそうですが、いまや五千人を割り込むまでに減少しています。このペースのまま進めば、遠からずこの町の人口はゼロということになります。町の広報紙に人口の増減表がいつも掲載されており、それを見ると、だいたい月に一〇名弱ずつ減少していることがわかります。年に一〇〇人の人がいなくなるとすれば、五〇年以内に、間違いなくこの町は消滅するのです。段々と人影がなくなり、車の往来もまばらとなり、店舗や民家も、シャッターや雨戸で閉ざされ、役場の職員も減り、最終的には、誰も住まない町になってゆくのです。

「人口戦略会議」の報告では、日本の自治体の四割超が「消滅可能性自治体」ということですので、この町が消滅するころには、日本の人口それ自体が、いまの六割程度に縮小することになります。とても想像しにくいことなのですが、これが、近未来のこの国の姿のようです。果たしてこの国は「消滅可能性国家」となるのでしょうか。（六月）

一七．新しい眼科を受診

少し目がかすむようになったので、数年前から隣り村の眼科に数箇月おきに通っては、白内障の進行を抑制する薬と目の疲れを和らげる薬を処方してもらっていました。ところが、昨年末で、閉院となりました。最後に出していただいた薬も切れ、つい先日、もらっていた紹介状をもって、さらに遠くの新しい眼科に行き、受診しました。

診断の結果は、矯正視力で右1.2、左1.0、眼圧は両眼ともに16、白内障「あり」、糖尿病網膜症「なし」でした。六箇月後に再び来院し、そのとき眼底検査をすることと、その日は、お薬を出してもらって、帰宅しました。

私の友だちも、閉院に伴い、この眼科に足を運んでいることがわかりました。遠くなったので、通院に時間がかかります。その友だちは、今後は銀行もガソリンスタンドもその姿を消せば、また時間をかけて、新しい銀行やガソリンスタンドまで通うようになるだろうといっています。昨年の秋、ふたつあったスーパーも、一軒店を閉じました。そしてまた、コンビニも一軒閉店しました。町の様子が、徐々に変化していることを肌で感じるようになりました。私は外からの移住者ですが、生まれたときからこの地で暮らしている人にとっては、この変化を、何とも言葉に表わせない無常の北風のような思いで受け止めているのではないかと想像します。もっとも、普通の北風であれば、いつかは春になり、暖かい南の風に代わって身を包みます。しかし、いま吹いている北風は、さらに冷たさを増すばかりです。（六月）

一八．寒暖の変化と長雨

私の庭にあるシャクナゲは、毎年、サクラが散って、四月末の連休がはじまるころに花を咲かせます。ところが、今年は例年と違って、まだサクラが咲いている四月のはじめに咲きました。おそらく、暖かい日が続いたからだと思います。

今年はまた、いつもの年と違って、鯉のぼりが勢いよく泳ぐような五月晴れはなかったような気がします。この間ずっと雨が断続的に降り続いていたためです。私は、毎週日曜日には庭に出て、落ちていた枝葉を集めたり、雑草を引いたりするのですが、今年は天候に恵まれず、なかなかそれできません。いつも庭もウッドデッキも、湿ったままの状態です。部屋の湿度も、だいたい八〇%前後のままです。まぶしい太陽の日差しが欲しくなります。

先日は激しい雨が数日続きました。そうしたときは、いつも不安になります。といいますのも、町に行くには、狭い牧野道を車で下りなければならないのですが、雨がが続くと、しばしば、土砂崩れが発生するからです。幸いにも、今年はまだそれはありません。しかし、おそらく牧野道ののり面の木が倒れ、電線を切ったのではないかと考えられますが、夜中に停電しました。乾電池式のテーブルランプも懐中電灯も手もとにも置いてあるので、慌てることはなかったのですが、それでもここを落ち着かせて、電力会社に電話をしました。しばらくして、地元担当の保安員の方から連絡があり、現場を確認したので、その様子を知らせて、作業班に出動を要請するとのことでした。それから、五、六時間が立ち、見事に通電するに至りました。深夜の雨のなかの作業は困難だったと思います。ただただ感動と感謝の一瞬でした。（六月）

一九．ふろの日

この地域には、町村自治体の補助金で成り立つ温泉が幾つかあったのですが、ここ数年で、経営が困難になり、その数が半減してしまいました。それに加えて料金も、数年前の三〇〇円から徐々に値上がりが続き、いまや二倍の六〇〇円になっています。私の場合は、一箇月に温泉に使うお金は一定ですので、三〇〇円の時代は毎日通っていたのですが、六〇〇円になってからは、半分の回数に減ってしまいました。

そうしたなか、私にとって「ふろの日」が、ありがたい制度となっています。毎月、二六日が「ふろの日」です。この日に行くと、一〇枚綴りの回数券を五千円で購入できるうえに、一枚の無料の入浴券がついてきます。

温泉料金だけでなく、あらゆる面での料金の高騰と節約志向、これがこの数年、生活者にのしかかっている重圧です。所得税の減税がはじまると聞きます。しかし、それは一時的なものであり、今後も物価の上昇は続く傾向にあります。生活しづらい時代に暮らしている、というのが偽りのない実感です。（七月）

二〇．集落単位の清掃作業

私の住む町は、幾つかの行政区で構成されています。昔ながらの「組内」と呼ばれる住民自治の単位です。古い時代にあつては、この単位で冠婚葬祭が執り行なわれ、地下水や入会

地が管理され、全員参加して、あぜ道や牧野道の草取りや清掃も行われていたそうです。しかし、その組織をまとめるには、さまざまな習わしや約束事がつきまとい、それに嫌気がさして、一見自由そうに見える都会に憧れて都会に出てゆく若者も多くいたと聞きます。その一方で、この古い住民組織は、外部からの移入についても、高い壁となって立ちはだかります。私自身も、一一年前に神戸からこの地に移住してきましたのですが、結局、この組織には入らず、町からの回覧文書は直接町役場に取りに行きますし、生活ごみも、ごみ集積場まで個人的に持ち運びます。そうした意味で、私自身は、この地域の自治組織とは無縁な状況で生活しているといえます。ところが、一点だけ接点があるのです。

毎年七月のお盆ころになると、集落挙げての道路の清掃とその周りの草取り作業があるのですが、こうした道路の保全是、私たち別荘地の住民にとっても日常的に使用する生活道路ですので、とても助かっています。そこで、別荘地ができた数十年も前から、別荘地の自治会は、そのお礼に焼酎二本をこの地域の行政区の区長さんの家に届けることが習慣となっているのです。私自身、この別荘地の自治会の代表を数年前から仰せつかっており、今年も清掃が終わると、スーパーに行って焼酎を買って届けに行きました。玄関先での立ち話になりますが、聞くと、いろいろな集落の様子を語ってくれます。いまの区長さんは女性ですが、この集落で女性が区長になるのははじめてのことだそうです。集落から人が離れてゆく傾向も悩みの種になっているとか。いつもながら、日本全体の縮図を見るような思いに駆られます。集落が機能しなくなれば、町の機能も失われます。そのときこの町は、そしてこの日本は、どうなっているのでしょうか。（七月）

二一．ボランティアによる大型ごみの回収

この町にも、社会福祉協議会という組織があります。二〇一六（平成二八）年の熊本地震が発生したとき、私は、身体も家屋も、問題ありませんでしたので、被災した家庭の小さな子どもたちに絵本の読み聞かせのようなことはできるのではないかと思い、電話をして、問い合わせたことがありました。しかし、そのときは、そうしたボランティアを受け入れる制度はないということで実現しませんでした。

それから八年が過ぎ、私も後期高齢者になりました。あるとき、民生委員の方が来訪され、社会福祉協議会に、ボランティアを派遣して大型ごみを回収する制度があるらしく、その制度の利用についての説明でした。高齢者になると体力的に大型ごみをごみ集積場まで搬入するのが困難になることが予想され、それを支援する制度のようです。ちょうど私も困っていたので、さっそく申込書に記入しました。

その後、社会福祉協議会から電話があり、訪問の日時が告げられました。当日、男女のふたりの大人と、ご婦人の小さな子どもさんの三人がいらっしゃって、さび付いた自転車や壊れた一輪車など、軽トラック一台分のごみをもっていってもらいました。いまや、人の支援を受けなければ生活が成り立たない、その入り口に立っている自分に気づかされました。（七月）

二二．母親の初盆

私にとって仏壇は何か暗いイメージがあり、そのため、実家を解体するときに、菩提寺でお焚き上げの処分をしてもらい、両親が使用していたさまざまな仏具だけを、私の住む草庵へもってきて、明るい感じの祭壇をこしらえました。腰高のチェストの上に赤い毛氈を敷き、金の屏風を立てます。ちょうど雛飾りに似た、しつらえです。

昨年の師走に母が亡くなりました。父親の遺影の隣りに母親の遺影を並べて置き、それ以降は、ふたりのために、花を飾り、水とご飯を日々取り換え、果物やお菓子を供えています。

両親が健在のときは、節目節目で手を合わせる程度で、仏壇のお世話をすることはありませんでした。そうした私が、在りし日の両親の姿に倣い、いまや祭壇を整えることに精を出しているのです。自分でも何か不思議な思いに駆られます。人は親の背中を見て育つといいますが、あながち間違いではないようです。

この夏、母の初盆が巡ってきました。菩提寺である熊本市内にある蓮政寺でお経をあげていただきました。いつものように広い本堂で、三人のご住職によるお勤めでした。参列したのは、私と、私の妹夫婦と、その娘の四人でした。小さな小さな法要です。そのあと近くの中華料理店で食事をし、両親の思い出などを語り合いました。子どもとして、元気な体で親の面影を偲ぶことができることを、ありがたく思いました。しかし、これも健康なあいだだけです。残された一年、一年を大切にしたいと思います。（八月）

二三．落ち着かない日本列島の夏

今年の日本列島の夏は、猛暑、地震、台風と、落ち着かない日々が続いています。

聞くとところによると、四〇度を超える地点もあるようです。どのような暑さか、想像することさえできません。といいますのも、私が住むこの山のなかにあつては、三〇度を超えることはほぼ皆無だからです。夏のあいだは、どの窓もほとんど開けっ放しの状態で、クーラーを使うこともありません。朝起きるのは、午前一時半ころですが、温度計を見ると、いつも二七度くらいです。それから夜明けころにかけて二五度くらいまでいったん温度が下がり、それから上がり始め、お昼ころに二九度くらいになるのが通例なのです。だいたい平地よりも四、五度は低いのではないかと思います。

先日、地震がありました。震度四くらいだったと思います。震源は、お隣の宮崎県の日向灘で、南海トラフの西端に位置します。一九九五年の阪神淡路の大地震と、二〇一六年の熊本を襲った地震の、ふたつの地震を経験している私は、ある意味で馴れており、決して慌てふためくことはありません。揺れが次第に激しくなっても、一定の限度まで冷静に待つ余裕ができているのでしょうか、今回も、ピークになる揺れを察知し、テーブルの下に身を寄せるまでには至りませんでした。

今年はこれまで、台風の数はい少ないようです。直撃に見舞われることはまだありません。しかし、先日の七号は、関東地方への上陸は、幸いに回避されたものの、飛行機や新幹線など交通への影響は大きかったようです。

猛暑に地震、それに加えて台風。これからもまだしばらく続くのでしょうか。気象変動と、何か関係しているのでしょうか。落ち着かない毎日です。（八月）

二四．鳥と蟻

ウッドデッキの手すりの一角に、水を入れた皿を置いています。すると、鳥たちがひっきりなしに水飲みや水浴びにやってきます。部屋にいながらの、バードウォッチングです。先日、こんなことがありました。一羽の褐色の鳥が飛んできて、水を飲み始めました。おそらくヒヨドリではないかと思われます。くちばしに水を含むと、頭部をまっすぐ上にあげます。それを何度も繰り返すのです。そこで考えたのですが、この鳥は、自分で水を飲み込むことができず、食道を垂直にした状態で胃に流し込んでいるのではないだろうか——。

そこへもう一羽の鳥が飛んできました。普通ですと、そこで先客はそそくさと退散するのですが、この先客は、数歩後ずさりをして、飛んできた鳥の水飲みをじっと見ているのです。そしてその鳥が水飲みを終えて立ち去ると、ゆっくりと先客は水の入った皿に近づき、また水飲みをはじめました。この仕草は何なのか考えてみましたがわかりません。怖いもの知らずの鳥なのでしょうか。それとも、周りを優先する優しいところをもった鳥なのでしょうか。

次は、鳥とは違う蟻の話です。災害に備えて食料品を備蓄しています。そのなかにカップラーメンがあります。先日備蓄品を点検していたら、カップラーメンの周りに、なかにあるはずの乾燥具材が散乱していました。最初すぐには事態が飲み込めませんでした。しかし、よく見るとふたの一箇所に五ミリくらいの穴が開いているではありませんか。そこで、そこからこぼれ落ちたことは、すぐにも合点がゆきました。しかしそれにしても、誰がどうして、なかの具材を外に運び出したのでしょうか。不思議に思っ、容器を手にもって揺すってみました。すると何と、その穴から蟻が何匹も出てくるではありませんか。驚きました。

それにしても、カップ麺を見つけ、そのふたに穴を開けてなかに入り込み、自分の体より大きな具材を幾つも外まで運び出し、そこから、おそらく土のなかの自分の住み家まで運ぼうとしていたのでしょう。驚くべき忍耐強い努力家です。確かに蟻は、働き者なのです。（八月）

二五．ネズミが出た

朝起きて見ると、テーブルに載せていた煎餅の位置が少しずれていました。次の朝また見ると、透明の薄いビニールの包みが破られ、少しかじられた跡が残っていました。どうやら夜にネズミが出たようです。わが家にはネズミが住み着いていて、これまでも、ときどき壁のあいだから物音がしたり、粘着シートのネズミ捕りに引っかかっていたりすることがありました。しかしそれは、いずれも夜の話であって、今回驚いたのは、何と昼間に出くわしたことでした。一瞬一匹の小さいハツカネズミが、開けっ放しの風呂場に入っていくのを目撃したのです。私は、すかさずドアを閉め、ネズミ捕りを取りにゆき、そっとドアを開くと、いました、いました。静かに近づくも、逃げる気配はなく、一気に粘着シートを上から被せると、首尾よく捕獲成功。シートをふたつに折ると、チューと鳴きました。この鳴き声はいつものことです。この世との別れのあいさつなのかもしれません。かわいそうな気がします。しかし、これもやむを得ません。合掌です。それにしても、人間とネズミの住み分けが、昨今、もはやできない状態になっているような気がします。そういえば、先日見つけたふたが破けたカップラーメンは、ネズミの仕業だったのかもしれません。（九月）

二六．今年は何アザミ

私の書斎の窓から、お隣りの地所が見えます。ここは土地だけで、家屋は建っていません。この時期になりますと、雑草が伸びます。その雑草に交じって、目を引く野草を見ることができます。不思議なことに、それが、毎年同じ野草ではなく、一年一年、変わるのです。今年は何アザミが、背が高くなった雑草の一部に群生しています。黄色や白のチョウがその周りを舞っています。アザミは、富本憲吉がしばしばモチーフに使った花です。葉の緑と、花の薄紅色のマッチングがいいのかもしれない。

こうした楽しみはあるのですが、放っておくと雑草は越境して、私の地所へも侵入してきます。これまでは、運動の一環として、自分で草刈りをしていました。しかし、寄る年波には勝てず、昨年からは土地の所有者の方に頼んで、草刈りをしてもらうことにしました。一区画の土地ですが、雑草の茂みがなくなると、それに連なる先のわずかながらの「大地」が見渡せ、広々感を味わうことができます。今年は、いつ草刈りがあるかわかりませんが、その「大地」に雪が積もるのも、そう先のことではなさそうです。（九月）

二七．夜明けが遅くなる

夏のあいだは、夜が明けるのは、五時ころでした。それがいまは、段々延びてゆき、最近では六時が過ぎて、やっと夜明けを迎えます。この時間帯は、いつも書斎の椅子に座り、仕事をしています。夜明けの時間になると、雨戸を開けます。窓越しに、東の木々のあいだから、太陽が少しずつ差し込んでくる気配が感じられます。ときには、透明の輝く光線であったり、またときには、赤い絵の具で描いたような光線だったりします。そうした日の出を追いながら、よくこの時間帯にお茶の休憩をします。一日がはじまるこの時間、私の勉強も半ばが過ぎ、ラストスパートとなります。

今日は、仕事を少し早めに切り上げ、久しぶりに日の出を見にゆきました。東の外輪山から昇る太陽は、書斎からの繊細でか細い日の光とは違い、大きく、強く、堂々としています。ご来光を仰いだあと、その足で、行きつけの温泉に車を走らせました。一番風呂の湯船に浸かり、照らし出された阿蘇五岳を眺める至福は、この世のものではありません。すべての疲れが、洗い流されてしまいました。（九月）

二八．南阿蘇の清水寺

いま私は、ウェブサイトで公開しています「中山修一著作集」の第一八巻に相当します「三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子」を書いています。いうまでもなく、高群逸枝は、日本における女性史学の最初の開拓者であり、橋本憲三はその夫で、逸枝没後、妻の遺稿を全一〇巻にまとめて出版した編集者です。そして、あまり知られていませんが、その夫婦を通じて新しく生き直す道を見出したのが、水俣病の作家として有名な、あの石牟礼道子でした。

高群逸枝の自伝には、『愛と孤独と』や『今昔の歌』、それに加えて『高群逸枝全集』の第一〇巻の「火の国の女の日記」などがあり、それを読んでいたなら、私が住む南阿蘇にあ

る清水寺の話が出てきました。以下は、「火の国の女の日記」のなかの一節です。

明治二十六年に、父は矢部郷の御所小学校からいまの松橋町豊川にあった磯田小学校へ転任のこととなったので、ちょうど私を妊娠中だった母をしたがえて、阿蘇南郷谷の清水観音に大矢越えをして四日ばかりで参拝した。

こうした事実をはじめて知った私は、さっそくそこへ行ってみたいと思いました。インターネットで調べてみると、阿蘇南郷谷の南外輪山の奥懷にある清水寺は、奈良時代の創建で、ご本尊は木彫りの千手観音像で、阿蘇西国三十三ヶ所観音札所の二一番札所と書かれてありました。続けて、地元に住む知り合いのふたりに、清水寺のことを聞いてみました。すると、ふたりとも、名前は聞いたことがあるが、実際に行ったことはないという返事でした。どうやら、日常的には村人との接触はあまりないようです。

とりあえず、簡単な地図を片手に車を走らせてみました。阿蘇五岳と南外輪山に挟まれた南郷谷は東西に県道二八号線が走っていますが、そのある地点から南外輪山の尾根を目指して狭い山道を登っていったところに、目的の清水寺がありました。こじんまりしたお寺で、お賽銭を入れて靴を脱ぎ、数段の階段を上って本堂へ入ってみました。お堂の隣りに住居らしき家がありました。おそらく住職の住まいではないかと思われましたが、人の気配はなく、結局、声をかけることはしませんでした。

一三一年前、高群逸枝の両親がここで女の子の出産を祈願したことを思うと、何か不思議な空気に包まれました。ふたりは、このとき、どのような旅姿だったのでしょうか。本堂のどこに座して、本尊にどう語りかけたのでしょうか。そして、ここから見渡す、阿蘇五岳と南郷谷は、彼らの目にはどう映ったのでしょうか。年が明け明治二七年の一月、無事願いどおりに、女の子が生まれました。その子は「観音の子」として、大事に育てられることになります。高群逸枝誕生の瞬間です。

清水寺は、私の草庵から車で二〇分ほどの距離にある、みぢかにも観音様を祀る寺でした。この日私は、執筆成就を祈願して、帰路につきました。（一〇月）

二九．木原山の不動尊

高群逸枝の全集の第一〇巻「火の国の女の日記」には、次のような一節もあります。

一九〇三（明治三六）年六月十四日、私たち一家は久具を去って、松橋駅から汽車に乗った。久具校の窓から北に親しく見えていた木原山の西麓を右手にみて、宇土半島のつけ根を横断し、つぎの宇土駅に下り、駅前からすぐと田んぼに入りこむと、もうそこは、高群勝太郎の新任地守富村のうちだった。

この一節にある木原山には、かつて雁を弓で射る名手が住んでおり、そのため雁は、この山を迂回して飛んだという逸話があり、これに由来して、別名この山は、雁回山と呼ばれます。他方、この山にある不動尊は、日本三大不動のひとつとして有名で、地域住民の信仰の対象として昔から敬愛されています。

私の祖父は、一八八三（明治一六）年に宇土生まれ、父は幼少のころしばしば祖父に連れられて木原山（雁回山）の不動尊に参詣していたといひます。そののち私も父のあとについて参拝するのが常となっていました。数年前に父は亡くなりましたが、その数箇月前にも、私の運転でこの不動尊を訪れ、お参りしたことが、いまとなれば懐かしく思い出されます。高群逸枝も、同じく「火の国の女の日記」において、こう回想しています。

この山には、後には自分ひとりでもよく登った。身を山中にひそめて、雑木のなかに悲しく風をきいた記憶がなつかしまれる。……私は木原山を「風吹く山」と呼んで親しんでいたが、いまもその風はむかしのままだに吹いていることだろう。

高群が「風吹く山」と呼ぶ木原山、私もいつかまた詣でてみたいと思います。そのときもその風はむかしのままだに吹いているにちがひありません。（一〇月）

三〇．衆議院選挙の結果

先日、衆議院の選挙がありました。その期間中、読売新聞からショートメッセージを使った調査への依頼があり、質問事項に答える経験をしました。前には朝日新聞のこの種の質問に答えたことがあり、これが二度目でした。

私は、期日前投票をしました。私の小選挙区では、三つの党からの候補者しか立候補しておらず、有権者にとって選択の幅が極端に狭められた状態にありました。どの小選挙区においても、すべての党が候補者を擁立する仕組みができないものか、投票に当たって私は、そのようなことを考えていました。

選挙の結果は、ひとつの党が過半数を制することはありませんでした。これまで「一強多弱」という言葉で揶揄されることがありましたが、ここへきて「多党多強」の状況が現われたのです。これにより、政治家や政党には、これまで眠っていた政策力、交渉力、説得力、妥協力、協調力といった真の政治力が試されることになります。私は、同調を越えて多様な考えや生き方が存在する社会にあつては、これが本来あるべき政治の状況であると思います。しかし、単なる私利私欲や党利党略に陥り、そうした求められる政治力が有効に働かなければ、「多党多弱」の泥沼に沈むことも予想されます。今後果たして、どのような政治世界が出現するのでしょうか。期待半分、不安半分、といったところです。（一〇月）

三一．熊本市立図書館と熊本県立図書館の対応の違い

私のような山野に引きこもって執筆する者にとって、なくてはならないのが公立の図書館です。まさしく図書館は、研究者の命綱なのです。しかしながら、私の住む阿蘇郡高森町には町立の図書館がありません。私は熊本県民ですので、熊本県立図書館は自由に利用できますが、一方の熊本市立図書館は、熊本市民ではありませんので、一時期までは使用に困難がついて回っていました。しかし何年か前に、自治体間に協定が結ばれ、高森町民も熊本の市立図書館を制限なく、利用できるようになりました。こうして現在、私は日常的に、熊本市立図書館と熊本県立図書館のふたつの館を利用させていただいています。ところが、この

両館には、利用上の対応にかかわって違いが幾つかあるのです。たとえば、以下の事例がそのひとつです。

両方の館とも、一度に一〇冊、二週間の借用ができ、連絡をすれば、さらに二週間借りることができます。つまり、延長期間を含めて四週間、自宅にて閲覧が可能となっているのです。しかし、そのあとの対応が異なります。熊本市立図書館の場合は、四週間後に返却に行き、予約が入っていなければ、ただちに新規に同じ一〇冊を借用することができます。しかし、熊本県立図書館の場合は、予約が入っていなくても、一度返却し、一週間くらいあいだを置いて、同一の書を借用するような規定になっているらしく、返却と同時の借用はできません。理由を聞いても、「規定がそうなっているから」の一点張りです。そのため、また一週間くらいものちに、片道一時間以上をかけて車を運転し、この図書館に足を運ばなければならないのです。どうして一週間ものあいだ、死蔵する必要があるのでしょうか。どう考えても、不合理に思われます。

私はいま、著作集 18 『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』を書いています。参考にするべき文献は、本当に山のようにあります。理想は、それぞれの館から常時一〇冊ずつ借りて、机の横において相互に参照しながら執筆することなのですが、現実には、なかなかそうはゆきません。ついつい愚痴をこぼすことになります。（一月）

三二. 国立国会図書館のデジタルコレクション

上に書きましたように、私はいま、著作集 18 『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』を執筆しています。この三人は熊本の出身であり、熊本市立図書館と熊本県立図書館に、彼らに関する貴重な資料が所蔵されています。それ自体は書き手にとってとてもありがたいことなのですが、その一方で、とりわけ高群逸枝の戦前の本は、閲覧に幾つもの制限が課されていますし、また、熊本県立図書館の場合は、比較的新しい戦後の書物であろうと、ほとんどが禁帯扱いになっており、館内で読むしかなく、日常的に不自由さを感じます。

ところがこの数年で、ひょっとするとコロナ禍で開館が制限されていたことも要因になっていたのかもしれませんが、国立国会図書館における蔵書のデジタル化が一気に進んだように感じられます。高群逸枝の戦前の書物も、書斎にいたがらにして、その多くをデジタル版で読むことができます。本当にありがたいことだと思います。欲をいえば切りがありませんが、さらにデジタル化を加速していただきたいし、加えて、現在閲覧方法は、「ログインなしで閲覧可能」「送信サービスで閲覧可能」「国立国会図書館内限定」の三種類ですが、新刊書は別にしても「国立国会図書館内限定」の制限をはずして、すべてのデジタルコレクションを「個人閲覧可能」にしてほしいという希望ももっています。そうすることにより、どこに住もうと、どの時間帯であろうと、すべての個人が、国立国会図書館の多くの資料にアクセスすることができるようになります。これは、地域間の利用格差の完全解消を意味します。いまは、山野に生きる独立研究者がひとり見る夢なのかもしれませんが、これがバリアフリーのオープン・アクセスの最終形態であると思われるし、これに向かって、地方の公立の図書館も含めて、すべての図書館が連携して邁進してほしいと願う次第です。（一月）

三三．阿蘇山の初冠雪

今年は夏の暑さが続き、紅葉もそれにあわせて、少し遅れてはじまりました。しかし、私の庭の紅葉もそうなのですが、紅葉にとっての大敵は、雨と風です。これで、一気に色づいた葉が落下します。

今年の庭の紅葉は、見ごろの期間が短く、それに代わって、朝の冷え込みが急に襲ってきた感があります。一昨日、阿蘇山が初冠雪しました。いまのところ山頂だけですが、もう少しばかりするとすそ野の山里にも雪が降り始めます。スタッドレスタイヤに交換しなければなりません。庭にある二箇所の水道の養生もしなければなりません。雪に覆われて外出できないときのための食料も確保しなければなりません。師走の声を聞くと、いよいよこれよりのち、冬の寒さ対策が進行します。高齢者の独り身にとって冬を越すのも、一苦勞です。（一月）

三四．「再出発」の二〇二四年が暮れてゆく

「晩年生活後半の再出発を誓う」——これが、この年の念頭に当たった私の思いでした。前年までに私は両親を亡くしました。身体的には、右足の膝を骨折し、ピンとワイヤーで固定しました。仕事のうえでは、ウェブサイトで公開しています「中山修一著作集」を全一五巻から全二四巻への構想が芽生えつつありました。そして、神戸大学を定年退職して一〇年が過ぎようとしていました。加えて、前年の誕生日で七五歳になっていました。このようななかであって、二〇二三年が終わり、二〇二四年が出発したのでした。

さて、そうやって幕を開けた二〇二四年ですが、どのような一年だったのでしょうか。八月に母親の初盆の供養を行ない、数日後の一二月末に一周忌の法事をします。体も、少し足を引きずることはありますが、杖がなくても、歩くことができるようになりました。著作集については、予定どおり、全一五巻を全二四巻に再編することができました。多くの人に支えられながら、「晩年生活後半の再出発」のための準備が整いました。感謝します。（一二月）

三五．「晩年生活後半」をイメージする

それでは、来年二〇二五年からはじまる「晩年生活後半」は、自分にとってどのような時間になるのでしょうか。いま私は、阿蘇の山のなかで独り暮らしています。その実態は、食事をつくり、部屋や庭を保つ、まさに生命維持のための「生活」と、頭のなかに散らばっている断片的な雑多な知識を、まとまった有機的な塊に組織立てる「研究」とから成り立っています。この「生活」と「研究」の両輪を、適切なスピードとバランスをとりながら、うまく回転させてゆくことが、私に残された「晩年生活後半」です。もうここまできると、その内容を事前に「計画」ということはできません。一日を一日としてしっかりと受け止め、「あわてず／あせらず／あきらめず」を肝に銘じ、確実に歩を進めるしかありません。私の東京教育大学の恩師は、インダストリアル・デザイナーの明石一男先生です。先日、その明石先生に関する幾つかの資料に目を通す機会をもちました。そのなかに、晩年の明石先生のモットーが出てきました。それは「不悔不諦」をいうものでした。タイミングよくこの時期

に、ありがたいお言葉に巡り会いました。私も、その思いをしっかりと胸に刻み、恩師のあとに続きたいと思います。（一二月）

三六．母の一周忌

年の瀬の三〇日、母親の一周忌の法要をしました。年末年始を利用して一時帰国した息子の四人家族も参加してくれました。読経を耳にしながら、母親の在りし日のことを偲びます。すると、こんなことが頭に浮かんできました。人はみな、生を授かり、いのちを燃やし、最後は死に絶え、土にもどります。それを永遠と繰り返しているのです。人は、そのいのちが誕生する前、どう生きていたのでしょうか。そして、土に帰ったあと、その人はどう生きるのでしょうか。自分が元気に日々を過ごしているときは、このようなことを考えることはありませんでした。しかし、自分の年が傾き、終わりが近づきはじめたことを自覚するようになったいま、その設問が自然と自分を襲ってくるのです。最後の日が来るまでのしばらくのあいだ、この問いと向き合いたいと思います。これも、母親が幼子に与える「なぞなぞ遊び」の一種なのかもしれません。（一二月）

第二編 二〇二五（令和七）年——喜寿を生きる

一．初夢（年賀状）

謹んで新春の御祝詞を申し上げます

私が研究の対象としているウィリアム・モリスは、一九世紀の英国において、詩人、デザイナー、政治活動家、経営者、環境保護運動家として活躍した多才の人物です。没後彼の娘が、全二四巻の「ウィリアム・モリス著作集」を編み、続けて補遺として二巻を追加して世に送り出しました。

昨年私は、ウェブサイトで公開しています「中山修一著作集」を一五巻から二四巻に再編し、この春には、それに二巻を加えて全二六巻にすることを計画しています。内容や質は、モリスの足元にも及ぶわけではありませんが、おこがましくも、せめて巻数だけでも、敬愛するモリス先生に近づきたいと思っていますのです。

記念すべき二〇三四年三月二四日のモリス生誕二百年の日が迫ってきています。何とか健康を維持しながらこの阿蘇の山野に隠棲し、この日をめどに、現在執筆中の巻や本文未着手の巻のすべてを書き終え、全巻完結したいと考えています。これが私にとっての今年の見果てぬ初夢となりました。

穏やかなお正月をお迎えのことと思います。

本年のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

二〇二五（令和七）年 元旦

二．情報と報道に関して

私は、この山野に暮らしはじめて、新聞も取らず、災害時以外は日常テレビも見ず、加えて、ソーシャル・メディアにはほとんど関心を寄せず、あたかも世捨て人であるかのような生活をしています。最近では、新聞もテレビも若者から見放されて、「オールド・メディア」と呼ばれているそうです。また、すでにマスコミは、「マスゴミ（大量のごみ）」という蔑称が与えられるまでになっています。メディアが発する情報や報道に対して私個人が接してきたこれまでの経験からすれば、それは、「知りたいことを伝える」新聞のような書斎的言論、「見たいことを見せる」テレビのようなお茶の間の動画、そしていまや、「思ったことを語る」SNS のような井戸端的世間話、このように推移してきたように感じられます。換言すればこれは、エリートの知識の占有、大衆の関心の共有、そして私的見解の拡散、そうした発信と受信にかかわる変化の推移といえるかもしれません。いま日本や世界で起こっている出来事の真実を知り、それを分析し、それに基づき自身の行動規範とするためには、私たちは、どのような情報や報道を生み出し、それをどのように受け取るのか、その仕組みが、問われているような気がします。単に回顧的に過去にもどることはもはやできないでしょう、かといって、このまま安易に未来を待つことも、同じくできないでしょう。情報や報道にかかわる発信と受信の新たな仕組みづくりがいま必要とされているように思われます。そして、そこで一番大切にされなければならないことは、人権を巡る取り扱いではないでしょうか。何人たりともが安心して生きるためには、人権無視も名誉棄損も、絶対に許されて

はならないと信じるからです。（一月）

三. 夜明けが早くなる

お正月から一箇月が過ぎようとするこの時期、夜明けが早くなったことを感じます。まだ薄暗いうちに書斎の雨戸を開け、窓を通して朝の陽ざしを楽しむことが日課となっているのですが、樹々のあいだから直線状に射しこむ朝日が、少し力強いものになってきたように感じられます。こうして一步一步春に近づいてゆくのでしょう。

毎年この時期になると、こうした感じがここに湧いてきます。しかし今年は、ことさらその感覚が強く、自分でも不思議な思いに駆られています。思うに、どうやらそれは、自分の加齢と関係があるようです。つまり、春を待つ潜在的思いが、年をとるにつれ、いままで以上に高まっていて、それが、少しの陽ざしの早まりに、素早く対応しているようなのです。裏を返せば、それほどまでに現状の冬のつらさが、老いた体に重くのしかかるように感じはじめてきたということかもしれません。

少し前までは、雪に覆われれば、車を坂の下に置くと、家とのあいだの約一キロを、防寒着を着て、長靴を履いて、杖をついてでも町まで行き、買物をしたり、銀行や郵便局に行ったり、コインランドリーで洗濯物の乾燥をしたり、温泉を楽しんだりしていたのですが、膝を骨折したこともあり、いまやそれだけの体力も気力も、段々と衰え、雪が積もっているあいだ家のなかに引きこもることが多くなったように思います。どうやら、冬景色も、こころを喜ばせる季節の風物詩ではなく、次第に、できれば避けて通りたい、苦痛の単なる「気象状況」になりつつあるのです。

どうやら、そうした心情が、敏感に、夜明けが早くなる一日一日の変化をとらえているようです。冬越しの大変さをしみじみと感じる年になりました。これもまた、健全な「衰退」の一環として受け入れなければならないのでしょうか。（一月）

四. 「血尿」が出る

血尿がでました。最初少し動転しました。原因は何だろう。大病の兆候か。

三回続けて出ました。しかし、それ以降は、通常の尿にもどったように感じました。一体、この血尿は何だったのでしょうか。私はかつてロンドンで暮らしていたとき、急に横腹が痛くなり、尿路結石を患い、入院のうえ、尿管から膀胱に落とした石を内視鏡で爆破して、尿として排出した経験がありました。そのとき、粉々に砕かれた石が尿道を通る際に摩擦により傷つけ、数日間、血尿となって現われました。この経験からして、この日の血尿も、本当に小さな石が尿道を通過した際の結果的現象ではないかと直感しました。

最初は驚きあわてて、病院に行こうか、膀胱がんではないかと、心配したのですが、もうこの年齢になると、いつ何が起こっても不思議はなく、しかも、がんで死ぬのが、長期の療養による家族の負担も少なく、最もいい最期であると聞いていましたので、それであればそれもよし、と腹をくくり、いまは、自己による経過観察をしています。

血尿の日、こんなことが頭に浮かびました。いま私は、高群逸枝を書いているのですが、彼女は、いっさいの来客を断って書斎にこもり、一日に一〇時間、勉強に専念したと書いて

います。すると体調に異変が生じ、経血が逆流して鼻血となって外に出たこともあったといひます。私の場合は、一日およそ五時間の勉強ですので、逸枝さんの半分です。しかし、雪に閉じこめられて家で過ごすことが多くなるこの時期は、一〇時間くらい机に向かうことがあります。そこで私も、過剰な勉強が血尿を招いたのではないかと思った次第です。

まあ、これは、逸枝さんだから絵になる話であって、私のような魯鈍な人間にはあてはまりません。それに思いが至って、自分で笑い転げてしまいました。血尿が、いい気分転換になりました。（二月）

五. 「つらら」が現われる

この時期、雪が降り、庭や道に、ウッドデッキに積もります。予報によりますと、今年の寒波は、「最強最長」とのことです。例年ですとこの時期は、大雪、あるいはドカ雪が一瞬にして降り積もるのですが、しかし今年は、通例の様子とは違って、中程度の雪が、積もっては融け、融けてはまた積もるという具合に、長期化しています。この間、外の温度は、日中も氷点下です。

確かに昼間の気温は氷点下二、三度の低温なのですが、それでも、太陽が出て陽ざしがあれば、積もった雪は融け始めます。屋根に積もった雪が日光に照らされて融けてゆき、軒下に滴り落ちますと、外気は氷点下ですので、落ちるしずくがそのままの状態ですり、垂れ下がることになります。こうして氷の棒ができます。これが「つらら」です。

小さいころに「つらら」を経験したことはありましたが、それ以降の東京や神戸での暮らしでは、縁遠い存在になっていました。いまこの年齢になって、再び「つらら」と再会しています。気温が上がりはじめると、軒下に何本も垂れる氷の棒は融け出し、一滴一滴、しずくとなって落下してゆきます。何か、自然が泣いているような光景です。春へと向かう合図かもしれません。（二月）

六. 著作集が二四巻から二六巻へ

私は、今年の年賀状におきまして、「昨年私は、ウェブサイトで公開しています『中山修一著作集』を一五巻から二四巻に再編し、この春には、それに二巻を加えて全二六巻にすることを計画しています」と書きました。その計画が現実のものとなり、いまここに更新することができました。この二六巻が、私の著作集の最終形態となります。内訳は、「デザイン史・デザイン論」が八巻、「ウィリアム・モリス研究」が六巻、「富本憲吉・富本一枝研究」が五巻、「火の国の女研究」が二巻、そして「肥後大阿蘇に生きる」が五巻、となります。加えて、別巻1として「主題別著述総覧」を、別巻2として「外部機関提供のデジタル・リソース」を用意しました。

そしてまた、私は年賀状に、次の一文を書いています。「記念すべき二〇三四年三月二四日のモリス生誕二百年の日が迫ってきています。何とか健康を維持しながらこの阿蘇の山野に隠棲し、この日をめどに、現在執筆中の巻や本文未着手の巻のすべてを書き終え、全巻完結したいと考えています」。さあ、この日まで、残り九年です。この四月に大学に入学する新入生が、研究者を目指そうとすれば、学部四年、博士前期課程（修士課程）二年、博士

後期課程三年の計九年を、勉学に費やすことになります。私も大学新一年生になったつもりで、必死に本と机を友として学問にいそしみ、九年後には著作集の全巻を完結するや、研究者としてやっと独り立ちしたという、その晴れがましい思いを胸に旅立ちたいと思います。（二月）

七. ネズミ三匹を捕獲

台所と隣り合わせの寝室の壁から、夜になると小動物の足音のような物音が聞こえてくるようになりました。おそらくハツカネズミが歩き回っている音です。それから数日後、朝起きてみると、サイドテーブルに置いてあったクッキーがかじられている光景に出くわしました。これまでの経験から、間違いなくこれは、ネズミの仕業です。どこにいるのか、居場所を突き止める必要があります。すると、システム・キッチンと壁とのあいだに小さい隙間があり、その隙間から出た床の上に、フンらしきものが数粒散乱していました。ここが、ネズミの移動経路のようです。そこで、その床の上に、粘着シートでできたネズミ捕り（およそ二〇センチ四方）を置き、シートの隙間よりの箇所に、好物であるにちがいない、かじられたクッキーをのせました。こうして外出して数時間後に帰宅して、そっと見にゆくと、何とそこに二匹のネズミが強力な粘着シートの上で、息絶え絶えの状態で横たわっていました。それを処分したあと、もう少しそうだったので、同じように、今度は、半分に切ったアンパンをのせて、新しい粘着シートを置いてみました。すると翌朝、そこに一匹の獲物がかかっていました。また、新しいものを置いていますが、変化はありません。壁からの物音も聞こえなくなりました。これでもって、一件落着であればいいのですが……。いつもながら殺生するのには、こころが痛みます。（三月）

八. 休暇村南阿蘇の日帰り温泉を楽しむ

これまで私は、お隣の南阿蘇村にある「四季の森温泉」に通っていました。同じ村にある「瑠璃温泉」が売りに出され休業に入ると、「四季の森温泉」に客が流れ、混雑するようになりました。そうしたなか、「休暇村南阿蘇」が日帰り湯をはじめたことが、話題に上り始めました。さっそく私も試しに行ってみました。家から近いこともあって、それ以降、こちらの温泉を利用しています。

行く曜日は、いつもどおり、だいたい月、水、金の週の三日です。買い物やコインランドリー、役場や銀行などの街中で用事をすませ、一時ころに駐車場に車を止めて、それから三〇分くらい隣接する野草園のなかをウォーキングし、一時三〇分の温泉の入館時間にあわせてチェックインします。高森町民は五〇〇円で、町民でない人は八〇〇円です。「四季の森」に比べて浴室が広々としており、ホテルだけあってアメニティ・グッズも充実しています。根子岳を目の前に眺めることができる露天風呂があり、清潔でくつろげるサウナもついでいて、とても快適です。

数年前に「高森温泉館」が廃館となり、つい最近も「月回り温泉」もなくなり、高森町からすべての温泉がなくなりました。そこへきて、「休暇村南阿蘇」の立ち寄り湯がはじまったわけです。しかし、お客は少なく、いつも閑散としています。毎日、一時三〇分から三

時までの宿泊客が利用しない短い合間の開館ですので、それが影響しているのかもしれませんが。営業的にはどうかわかりませんが、私のような、ゆっくり温泉を楽しみたい地元民にとっては、ありがたい憩いの場となっています。（三月）

九．トイレのタンクに水が溜まりにくい

二月の後半、強い寒波が長期間居座りました。外の最低気温は、いつもマイナス六度から八度まで下がり、日中も氷点下の日が続きました。まさに、冷蔵庫のなかにいるような環境です。しかし、書斎はエアコンと電気ヒーター、食堂兼居間はエアコンとガスヒーターのおかげで、設定した二〇度が維持され、快適です。

そうしたある日、トイレのタンクに水が溜まりにくくなりました。前に一度そうした現象があり、そのときは、水の出口の所についているフィルターの汚れを除去することで解決しました。それで今度もそうしてみました。しかし、うまくゆきません。全く出ないわけではないのですが、つららから滴り落ちるしずくのようなもので、一滴一滴しか出ず、タンクに溜まるのに時間を要すのです。これでは、短い時間を置いて次に使う場合に支障をきたします。

そこで考え付いたのが、水道管のどこかで凍結が発生しているのではないか、という仮説でした。であれば、暖くなるまで待つしか解決の方法はありません。完全停止しているわけではないので、気長に様子を見ながら、それでも水の出が悪ければ、業者を呼ぶしかないと思い、そのままにしていました。

それから一、二週間が立ちました。流したあと、水の流れ出る音が聞こえてきました。ということは、水の出がよくなったことを意味します。タンクのふたを開けて、のぞいてみると、間違いなく以前より、多くの量の水が流れ出ています。凍結が原因だったのか、そうではなくて、何かのきっかけによる自然回復だったのか、それははっきりとはわかりませんが、いまや少し、暖かさを感じるようになってきたことは確かです。このまま、後戻りすることなく、春へ向かうといいのですが、これもまた様子見といったところです。（三月）

一〇．泌尿器科へ行く

二月のある日、続けて三回ほど血尿が出ました。それから一箇月ほど立った日に、また血尿が出ました。これは何かのサインかもしれないと思い、四月に入り、隣り村にある病院を訪ねました。この病院では週に一回、非常勤の泌尿器科医の先生が診療に当たられています。

この間の経緯を話したあと、さっそく尿検査と残尿測定、それに CT 撮影をしました。結果は、膀胱に二センチくらいの大きさの腫瘍があるとのことでした。そして、確認すると、膀胱にできる腫瘍は悪性の場合がほとんどということでした。つまり、がんができているらしいのです。

この病院は、これ以上の検査と手術に必要な人材と設備が整っていません。そこで、熊本市内にある規模の大きい病院で再検査することを勧められ、予約を入れてもらいました。果たしてどんな検査結果が出るのでしょうか。

実は私は、定年の一年前に前立腺がんが見つかり、神戸大学医学部の附属病院で全摘出の

手術を受けています。それで、がんの告知は、二度目になります。人は、いつかはその時を迎えるのですが、それがいまや現実のものになろうとしているのです。しかし、余分なことは考えず、すべては結果を待って、残りの人生の処し方を考えようと思っています。（四月）

一一．柳川の川下りを楽しむ

この地区に住む高校の同窓生が集まって、柳川の川下りを楽しみに出かけました。これまでは、サクラの下での酒宴でしたが、去年の春から、少し遠出するようになりました。今年の「柳川川下りの旅」は、去年の「A 列車で行く天草旅行」に続くものになりました。

私は、はじめての体験でしたので、とても楽しみにしていました。しかし前日夜半から雨になり、天候が心配でしたが、夜が明けると、小雨になり、予定どおり小型バスに乗り込み、さっそくビールを開けて、歓談がはじまりました。伝統的に、こうした行事には伴侶を同伴される方が多く、この会の特徴となっています。今回は、総勢一五名が参加しました。

柳川に着くころには、完全に雨も上がり、絶好の行楽日和になりました。川下りの舟は、われわれ一行の貸し切りでした。まだ兩岸にはサクラが残っており、酒とつまみで、さらに会話が盛り上がりました。一時間ほどの、船頭さんの案内による、舟遊びでした。ちょうど途中で、和装の花婿と花嫁を乗せた舟に出合いました。船頭さんの話によると、この一団は、「御花」という名の由緒ある料亭での披露宴へ向かうところであるとのことでした。

私たちの舟も、「御花」に着きました。「御花」は、立花家と呼ばれ習わす名前で、屋敷と敷地は、戦国時代に活躍した藩祖立花宗茂の時代にさかのぼることでした。ここで、昼食として「ウナギのせいろ蒸し」をいただきました。もう柳川には天然のウナギはいないそうですが、しかし、久しぶりの美味を堪能しました。

庭園は、松濤園と呼ばれる、松と石で構成された実に立派なものです。残念ながらこの日は、結婚披露宴のために貸し切りとなっていて、窓越しに眺めるだけで、中に入って散策することはできませんでした。しかし、明治時代に建築された「西洋館」には足を踏み入れることができ、そこで雛飾りや「さげもん」を見ることができました。

「御花」を出た一行は、歩いて北原白秋の生家跡と記念館を訪ねました。白秋の生家が造り酒屋であったことをはじめて知りました。一時間くらいの見学でした。その後、再びバスに乗り込み、帰路につきました。（四月）

一二．熊本市内の病院で膀胱がんの検査を受ける

四月の二四日、済生会熊本病院で、採血、採尿、心電図、腹部エコーの検査後、医師の診察を受けました。エコー検査の結果、膀胱腫瘍（膀胱がん）の疑いがあるということで、ただちに膀胱鏡検査を受けることになりました。これは、尿道からファイバースコープ（内視鏡）を挿入し、膀胱内を観察する検査です。これにより腫瘍の存在が確認されました。そして、五月一六日からの二泊三日で、TURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）による手術が行なわれることが決定されました。

翌二五日、造影 CT 検査を受けました。これは、ヨード造影剤を静脈内に投与し、X 線と

コンピューターを使用して、体内の病変を調べる検査です。続く、二八日に MRI 検査が行なわれ、その後に、CT と MRI の検査結果についての説明が医師からありました。

結果は、個数はたぶん一個で約三センチの大きさ、場所は膀胱の上部、上皮にできた表在性のがんで、おそらく筋肉層への浸潤はなく、また、他の臓器への転移も見当たらず、最終的なステージと五年生存率については、TURBT の手術後に正確に判明するということでした。ただ、私の場合は、一回の TURBT ではすべてを切除することができないことが予想され、そのため、約一箇月後に二回目の TURBT を実施することが示唆されました。また、この手術により根治が期待されるものの、表在性膀胱がんの場合は、術後二年で二割から五割の確率で再発する可能性があり、定期的経過観察が必要であることも示唆されました。

これを聞いた私は、それまでにネットで調べた情報と照らし合わせて、私のがんはステージ I で、五年生存率は七〇パーセントではないかと、自分なりに判断しました。これは、私と同じ症状にある人が一〇〇人いるとすれば、そのうちの三〇人は五年を待たずして死亡することを意味します。この程度で収まったことをよしとするのか、いまは複雑な思いです。次は、五月九日に麻酔科の医師の説明を受け、その一週間後の一六日にいよいよ施術となります。（四月）

一三．手術入院前夜

いよいよ明日、済生会熊本病院に手術入院をします。

入院に際して、今週は毎日検温をしたり、かかりつけの病院から処方された薬の一部を止めて、済生会からの薬を飲んだり、昨日と今日は、下剤の服用もしました。明日早朝の坐薬で、薬の管理も終わります。入院用具の準備もほぼ完了しました。血尿もなく、排尿痛もなく、体に違和感はなく、病院に行くのが不思議な感じがします。日ごろは土日もなく、毎日五時間勉強をしていますので、この二泊三日で、ゆっくり休養をしたいと考えています。そのためパソコンはもっていきません。

人は自分の死に方の選択はできませんが、がんによる死が一番いいと、友だちもかかりつけの医師もいいます。心筋梗塞は、あっという間の出来事になりますし、脳梗塞は、言語や身体に障害が残ります。がんの場合ですと、その時が来るまである程度時間があり、食べたいものも食べ、会いたい人にも会え、子どもにも自分の思いを伝えることができます。そのことを考えると、自分は幸運であると思っています。

これから二回の手術を受け、それから、おそらく三箇月間隔の経過観察が続くものと思います。まさしく「闘病」という生活に入るわけです。何とか五年間は生存したいという目標をしっかりとって闘っていかうと思っています。五年生きれば、私は八一歳になり、男性の平均寿命に到達し、早くもなく、若くもなく、自分も周りもそれが受け入れやすくなるだろうと思うからです。ただ、著作集は完結するにはまだこれから九年が必要です。一部未完に終わることになりますが、あまり欲張ってもいけませんので、これくらいがちょうどいいのかもしれません。

普段は四時就寝ですが、明日からの病院生活を考えて、今日は八時に夕食をとり、そのあとベッドに入るつもりです。明日は完全絶食です。一〇時から水分補給も禁じられています。六時に起きて坐薬を入れ、少し勉強をして、一〇時半ころに家を出て、途中熊本市立図

書館（東部公民館図書室）に寄って借りている一〇冊の本の返却と再借用の手続きをして、受付時間の一二時三〇分までに着くように病院に向かいます。（五月）

一四．手術入院

膀胱がんにおける TURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）の手術には、ふたつの目的があります。ひとつは、膀胱内部の腫瘍を切除するという治療目的です。もうひとつは、切除した腫瘍の悪性度を病理学的に調べるという検査目的です。つまり、治療と検査を兼ねてこの手術は行なわれます。

別室で、体温や血圧を計ったり、特別の靴下に履き替えたり、そしてパジャマに着替えると、職員に案内されて中央手術室に入りました。廊下を挟んで左右の両側に、番号が付いた手術室が長く並んでいました。十何室かあったように記憶します。私が入室したのは、七番の番号が付いた手術室でした。麻酔は、全身麻酔ではなく、下半身だけの脊椎くも膜下麻酔であることを事前に告げられていました。手術用のベッドに横になると、すぐにも意識がなくなり、手術の様子は全くわからないまま終了しました。すこし意識がもどったときは、すでに手術は終わり、そこから入院用の病室に運ばれました。

到着すると、すぐに抗がん剤をカテーテルの管を通して注入されました。支柱（点滴スタンド）には、上に点滴と生理食塩液、下に尿袋（尿道留置カテーテル）がぶら下がっていたような記憶がうっすらと残っています。先生は、「切る」とか「切除する」とかという言葉はほとんど使われず、「削る」という表現をされます。おそらくこの手術は、電気メスで腫瘍を「削る」感覚で取り除くのではないかと想像されます。当初二泊三日の入院が予定されていましたが、先生の説明によりますと、広範囲に「削った」ので、入院を二日間延ばして、様子を見たいとのことでした。

手術当夜は、都合がつかず、二人部屋で一夜を明かしました。痛みがある場合は鎮痛剤を処方するとのことでしたので、覚悟はしていたのですが、耐えられないほどの痛みはなく、結局、痛み止めを使うことはありませんでした。

翌日、希望していた個室に移りました。窓からは、遠く私の住まいのある阿蘇が望めます。シャワーもついていて、さっそく利用しました。三度の食事もすべて完食し、大きなトラブルに襲われることもなく、無事四泊五日の入院が終わりました。カテーテルの管が取れたのは、退院前日でした。

次は、六月九日の外来受診のときに、病理検査の結果が告げられることになります。はじめてここで、ステージ幾つかが判明し、今後の治療方針が明らかになります。私の素人判断では、ステージⅠ、二度目の手術入院後、三箇月おきの経過観察になるのではないかと思いますし、またその程度で止まってほしいと願っています。果たしてどうなりますか——。六月九日の受診までは、とりあえず体のことは忘れ、いままでどおりの生活と仕事に集中したいと思います。（五月）

一五．変化、それとも異常現象

この数年、この季節に感じることは、この森において、鳥の鳴き声がほとんどしなくなっ

たことです。以前は、春から秋にかけて、いろんな鳥の鳴き声がこだまして、こころに安らぎを与えてくれていました。鳴き声が減少したのは、鳥がいなくなったからではないかと思えます。私の散歩コースは、休暇村南阿蘇に隣接する野草園を一周することですが、この時期、望遠レンズをつけた大型のカメラをもった人たちとすれ違います。どうも手持ち無沙汰です。聞くと、やはり、被写体となる鳥がいなかったということでした。

夏の虫や蝶が姿を消したのは、もう一〇年以上になります。それまでは、夏になると、夜、網戸にいろんな種類の虫や蝶が集まってきていました。しかし、いまはもう、そうした生き物を目にすることはありません。

虫や蝶に加えて、鳥までもいなくなりつつあります。気温や湿度、日照時間や降雨量などと関係があるのでしょうか。

その一方で、ものの値段が高騰しています。コメに至っては、わずかなあいだに、二倍以上の価格に跳ね上がりました。食料品だけでなく生活用品も、またガソリンやガスや電気の料金も高止まりしています。これは、単なる変化ではすまされません。明らかに異常事態です。この現象も、虫や蝶や鳥がいなくなる現象も、根底では、ともに私たち人間の「異常」に由来しているように思われます。人間はいつから、どのような理由で、「異常」に陥ったのでしょうか。もう回復は望めないのでしょうか。（五月）

一六．診断の確定と今後の治療

病院から無事帰宅して、夕食を食べ、就寝したのが七時でした。いつもより三時間の遅れです。何度かトイレには行きましたが、今朝起きたのが七時。何と一二時間の睡眠でした。体調は良好です。全く心配はいりません。

昨日の診療の際に、前回の手術で採取した腫瘍組織の病理検査の結果についての説明がありました。以下にそれを箇条書きにします。

- ・私の膀胱にできた腫瘍は、膀胱内部の上皮にできた筋層非浸潤性がんだそうです。ステージⅠになります。これまでは、「腫瘍」という取り扱いでしたが、これで、正式に「がん」として診断が確定したことになります。それはつまり、これから治療に入ることを意味します。

- ・治療の進め方は、まず、来月の七月一〇日に、前回と同じ TURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）を受けます。前回の取り残しを切除するためです。一応二泊三日の予定ですが、出血が多いときなどには、前回と同じく主治医の判断で入院が延びることもあります。

- ・この手術のあと、一週間に一度、六週間にわたって、BCG を膀胱内に注入します。膀胱がんの特徴は、再発の可能性があることにあり、この治療は、がん細胞を死滅させ、再発やステージの進展を予防する目的で行なわれるものです。しかしながら、この治療には、人によっては激しい副作用（血尿、排尿痛、排尿困難、発熱等）が伴い、途中で別の治療に変更することもあるそうです。

・BCG 注入の治療のあとは、二、三箇月おきに来院して、内視鏡で膀胱内を観察し、再発が確認できれば、そのつど TURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）により切除することになります。これをとりあえず二年間続けることになるとのことでした。しかし、この切除手術を繰り返すと膀胱の機能に悪影響を与え、結果として、尿路の変更、つまりは膀胱の全摘出による人工膀胱への切り替えをしなければならない事態へと発展する可能性もあるとのことでした。

・五年生存率についてお聞きしましたが、明快な答えは返ってきませんでした。ネットで調べる限り、七〇%か八〇%ではないかと推定されます。この数値は、私の同じ状態の患者が一〇〇人いれば、その内の二〇人から三〇人は、五年以内に死亡することを意味します。

主治医によれば、以上が、この状態のがんに対する最良の標準的な治療方法だそうで、私もそれに同意しました。これから、いよいよがんとの闘いがはじまります。

主治医から受けた説明で印象的だったのは、かなりの確率で再発するため、何とかそれがステージの進展や他器官への転移につながらないことが最も重要である、ということでした。ステージⅡおよびⅢに進展すれば、つまり、筋層浸潤性がんが発生すれば、膀胱を全摘出し、それに代わって人工の膀胱を装着することになりますし、他の臓器への転移が認められるステージⅣになれば、もはや膀胱の摘出もなされず、全身の抗がん治療となり、まさしく終末期の医療に入ることになるのです。

私は、ステージⅠであったことにとりあえず安堵しました。何とかあと九年生きて、著作集全巻を完結する見通しが少し見えてきからです。しかし、これからの治療の過程で、望まない状況に進むことも、一方で十分考えられます。少しずつ様子を見ながら、そのときそのときで最善の対応をとるしかありません。楽観もせず、悲観もせず、現状をしっかりと認識したうえで、一日一日、充実した勉強と、山での自然の生活を楽しまたいと考えています。（六月）

一七．みなみ阿蘇・野の花コンサートの開催

今年も、みなみ阿蘇・野の花コンサートが開催されました。八回目になります。このコンサートは、一九八一（昭和五六）年から二〇一四（平成二六）年まで三四回にわたって開催されてきた「はなしのぶコンサート」を継承するものです。これまでは、阿蘇野草園の屋外を会場に催されていましたが、今年から、お隣の休暇村南阿蘇の「テラスハウス」での開催になりました。この時期は雨が多く、演奏者にとってはこの方がいいのかもしれませんが。しかし観客は、持参した敷物やイスを使つての野外からの鑑賞となります。私もイスと傘を用意しました。ときおり小雨が降りましたが、予定どおり、最後まで進行してゆきました。

出演したのは、地元の高森高校 SPO 吹奏楽団と南阿蘇中学校吹奏楽部、熊本市内の尚絅中学校・高等学校のギターマンドリン部などの団体でした。これが第一部で、午後からの第二部では、熊本県立鹿本農業高校の生徒や東海大学の学生らによる野草を守る取り組みの報告、加えて阿蘇野草園観察会が予定されていました。私自身は、第一部だけの参加でしたが、その幕間を利用して、「ハナシノブについて」と題して専門家による短い講話がありま

した。ハナシノブは、茎が三〇センチから五〇センチほどまっすぐに伸び先端に薄紫の小さな花を咲かせる、この土地にしか自生しない、いまや絶滅危惧種に指定されている、貴重な植物です。講話によりますと、これまでにハナシノブを絶滅に向かわせていた要因としては、「盗掘」「原野の縮小」「交雑」の三点が考えられていましたが、近年はそれに加えて、「気候の温暖化現象」の脅威を見逃すことができないとのことでした。今年のこの土地の気温は、前年までの平均気温を二度上回っており、わずか一度の上昇であっても、植物の生息には大きな危険因子となっているようです。この日は、「テラスハウス」のステージに上がる階段に一〇体のハナシノブの鉢植えが並べられていました。

大自然のなかに響き渡る吹奏楽やマンドリンの美しい音色を聞きながら、他方で、ハナシノブの息苦しさを訴える声に耳を傾けながら、梅雨の日のひとときが、今年もまた、過ぎてゆきました。（六月）

一八．娘の来熊

去年に続けて、仕事の関係でこの時期、神戸に住む娘が熊本に来ました。私の山の家に二泊しました。話題はどうしても、私のがんのことになります。まだ私にがんが発生する数年前から、先を見越して、不測の事態に際しての対応について、ふたりの子どもに伝えていたのですが、いまや、それがやや現実のものとなり、この滞在のうちに、改訂版「私の今後について」をつくり、その内容を娘に伝えました。シンガポールに駐在する息子には、例年一時帰国する年末年始に伝えたいと思っています。

ひとり暮らしの老人が増えていくといいます。私もその仲間です。一番気をもむのは、最期に際して、子どもたちに迷惑や負担をかけたくないという思いの扱いです。最後の入院、葬儀、家や家財の処分、どれをとっても、大変重たい対応を強いることになります。これから、がんとの闘いがはじまります。事態の変化に伴って、「私の今後について」の文章も書き換えてゆくことになります。いよいよ私の人生も、終わりに近づいてきています。これがいまの実感です。（六月）

一九．図書館での珍事

熊本市内にある図書館に行きました。一〇冊借りていた資料のうちの三冊を返却し、残りの七冊を再借用、加えて、新たに三冊を借りる手続きをしました。新規借用の三冊は、これから書庫に行き取りそろえておくので、退館するときに受け取ってはどうかということになり、私はその提案に従い、閲覧室で別の資料に目を通すことにしました。二、三時間が過ぎ、予定していた資料の閲覧が終わりました。そこで再び窓口へ行き、頼んでおいた図書を受け取ろうとしました。すると、司書の方が数人集まって、何やらひそひそ話がはじまりました。どうやら、何か問題が発生したようです。コミュニケーションが途絶え、虚無的な時間が流れてゆきました。

結論が出たのでしょうか、ひとりの司書の方がカウンターから出てきて、私に話しかけました。その説明によると、私が借用の手続きをした三冊を、間違って別の来館者に渡し、その来館者はすでに館外に出てしまったようです。そこで、これからその人に連絡をとり、指定

場所まで受け取りにいき、返却が確認されたら私に連絡するので、いましばらく待つてほしいということでした。

なぜ担当者は本人確認をしないまま、渡してしまったのでしょうか。また、来館者は、内容確認をしないまま、受け取ってしまったのでしょうか。一瞬、キツネにつままれたような話の内容でしたが、人間のミスは、えてしてそのようなものであると、これまた不思議にも魔法にかかったように、怒りも笑いも何もなく、感情が停止したまま、その状況を受け入れてしまったのでした。（六月）

二〇．町による備蓄米の配給

次のようなことが、新聞紙上で報道されました。

熊本県高森町は、コメの不足や価格高騰への対応を求める町民の要望を受け、民間からコメを仕入れ町内の子ども食堂や子育て世帯などに無償で配布する緊急支援事業を始める。配布は七月上旬を予定。町によると、今回の米価高騰を受けて自治体が現物配布方針を打ち出すのは熊本県で初めてという。

JA系の熊本パールライス（菊陽町）から、政府備蓄米（二〇二三年度）を五キロ当たり三、四〇二円で計一〇トン購入する。配布先は子ども食堂四箇所、中高生の下宿五箇所、一八歳以下の子どもがいる三五六世帯、六五歳以上の単身高齢者の七一九世帯、精米したコメを食堂には九〇キロ、下宿は子ども一人当たり一〇キロ、子育て世帯は一〇キロ、高齢者世帯は五キロ配る。

配布は高森町内のコメ販売店三箇所に委託。対象者は、町が発行する引換券を販売店に持ち込む。引換券は高齢者には町が郵送。子育て世帯は世帯主が町の公式LINE（ライン）を通して申し込み、電子チケットを受け取る。余ったコメは学校給食で活用する。

以上が、新聞が報道したおおまかな内容です。

それからしばらくして、町役場からお米の引換券が送られてきました。（七月）

二一．セカンドTURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）

予定されていた七月一〇日、二度目のTURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）を受けました。前回と全く同じ内容の手術ですので、幾分気持ちに余裕がありました。手術が終わり病室に運ばれました。主治医から、内視鏡で見える限り、がんの組織はすべて切除したことが告げられました。二泊三日の入院中、前回のように体調や気分には大きな陰りがあるようなことはありませんでした。事前に医師から聞いていたのですが、二度目とあって、免疫力が形成されていたのかもしれませんが。翌日には、点滴も、尿道留置カテーテルも取れました。痛みはなかったものの、血尿が続いていたので、止血剤を服用することになりました。退院予定の朝になってもまだ完全に普通の尿の色にもどっていなかったのですが、私の希望もあって、主治医の許可が出ることになりました。私の思いのなかにあって、あと一日か二日で改善することが、前回の経験から感じられていたからです。

予感どおり、退院して自宅に帰って翌日には、血尿が止まりました。しかし、頻尿と尿漏れの解消までには、まだ時間を必要とする状態でした。退院から三日後、予定どおり病院か

ら現状確認の電話がありました。血尿改善の話をする、「それはよかったですね」という返事が返ってきました。次は、今回の手術で採取した細胞の病理検査の結果を聞くために、八月四日に病院に行きます。そしてそのとき、今後の薬物治療についての説明があるものと思われま。やっとふたつ目の山を越えました。しかし、まだ闘いは続きます。（七月）

二二．死を前提に生きる

主治医の先生との会話のなかで、職業を聞かれる場面がありました。そのとき私は、かつて大学で教鞭をとっており、いまは阿蘇の山のなかで執筆に専念し、ウェブサイトに掲載している全二六巻の「中山修一著作集」の完成に向けて日々の暮らしを楽しみ、完結まであと九年かかりま、と答えました。するとその医師は、「がんばって、執筆を早めてください」と、言葉を返してくれました。それからというもの、その言葉は励ましの言葉であったと思われるものの、つい思い出しては、もう自分は、九年は生きられないのではないかと反芻するようになりました。膀胱がんのステージⅠの五年生存率は、七〇%といわれています。同一病状にある一〇〇人中三〇人は、五年以内にステージが上がったり、他器官に転移したりして最期を迎えるのでしょう。それを思うと、何か人生のはかなさのようなものをどうしても感じてしまいます。そうなりますと、「どうせ死ぬのだから」という言葉が、口をついて出てきます。しかし、最近になって、「どうせ死ぬのだから」といって投げやりになったり、諦めて内側に閉じこもったりしないで、「どうせ死ぬのだから」もう少しよりよく生きてみたいと思うようになりました。そんなある日、スーパーで「ニッケ玉」が目にとまりました。七〇年前の自分がそこにいました。すーっと手が伸びました。どうやら私にとって死を前提にしてよりよく生きるとは、ほんの小さなことに喜びを見出すことのようにです。（八月）

二三．薬物治療開始

退院から三週間が過ぎ、予約していた日時に病院に行きました。二回目のTURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）の病理検査の結果が出ていました。一回目と同じステージⅠでした。進行していないことに安堵しました。しかし、血尿は止まっていたましたが、頻尿と尿漏れはまだ続いていました。主治医の説明によると、これは膀胱炎の症状ということでした。そこで、抗生物質とロキソプロフェン（痛みや炎症を抑える薬）が処方されました。ロキソプロフェンは確かに私に効果的でした。一日食後三回の服用ですが、飲んで五、六時間くらいは、頻尿も尿漏れも和らぎ、快適な時間を過ごすことができます。しかし、効果時間が過ぎると、再び一時間か三〇分間隔のトイレタイムが襲ってきます。睡眠中に頻りにトイレに行くのは、大変なつらさを伴うだけでなく、全体として生活の質を落とす要因にもつながってゆきます。

そうした生活が二週間続いたあとの八月一八日、予約に従って、再び病院に行きました。まだ、わずかながら膀胱炎の症状が続いていることを先生に話すと、BCG注入の治療に入るかどうか躊躇されている様子で、私に意見を求められました。私はそのつもりで覚悟を決めて今日来ていることもあり、先延ばしにせずに、今日から注入治療をはじめてほしいと要望しました。

それを受けて治療がはじまりました。すべての作業をひとりの看護師さんが行ないます。尿道から膀胱までカテーテルを入れ、それを通して尿を自動的にすべて排出し、そのあとに、今度は逆に BCG 溶液四〇CC を注入していきます。時間にして一〇分程度です。それが終わると、この溶液が膀胱内部の全体に行き渡るまでの一時間、待合室での待機となりました。時間が来たところで、看護師さんに呼ばれ、紙コップにすべて尿として取り出し、これで一連の一回目の注入治療が終わりました。

先生からは、激しい頻尿や尿漏れ、血尿や排尿痛などの副作用があることを聞かされていたので、覚悟はしていたのですが、一晩明けたいまに至るまで、不思議なくらいに、全く副作用は出ていません。一週間後の来週月曜日が二回目の治療になりますが、何とかそれまで、副作用なしの生活ができればと、思っているところです。しかし副作用は、三回目くらいからより強くなるとも聞いていますので、まだまだ楽観はできません。

それでも、こうして無事に一回目が終わったことに、ほっとしています。これで、支障なく執筆が続行できます。執筆がいまの私の支えになっています。順次一卷一卷を完成させたいという強い思いが耐性なり免疫力となって、副作用を和らげているのかもしれませんが。（八月）

二四．支援金の支給

熊本県 LP ガス支援金審査サービスから、LP ガス価格高騰対応支援金の支給についてのお知らせが郵送されてきました。それによると、今後三週間程度で、記載の振込先口座に五千元が入金されるとのことでした。この支援金は、これで三回目となります。思ってもいなかったことで、本当に助かります。

かつての一時期に比べると、LP ガスだけでなく、電気料金や車のガソリンも高騰しています。さらにそのうえに、米や野菜や果物、肉や魚も、高止まりしていて、大きく生活を圧迫しています。いつまでこうしたインフレ状況が続くのでしょうか。先が見通せない不安感や、将来に希望がもてないことに対するいらだちは、若者世代に多いようです。収入は伸びず、支出だけが増える状況が続くと、人間誰しも生きる力をなくし、うつむいてしまいます。いまこうした困苦の感情が私たちの実生活をどんどん蝕んでいるのです。その結果、将来、何が待っているのでしょうか。想像するだけで、恐ろしくなります。年寄りの取り越し苦労であればいいのですが。（八月）

二五．BCG 膀胱内注入の副作用か

先週の水曜日から、左のお尻からふくらはぎにかけて関節痛が出て、歩行に困難が生じる状態になりましたが、座っている限りは、痛みを感じないほどの症状まで回復しましたので、昨日は、病院に行き、四回目の BCG 膀胱内注入を行ないました。車の運転中は全く痛みを感じることはありませんでしたし、杖も携帯しました。

関節痛が、この治療の副作用かどうか、主治医に聞いたところ、いまのところ判断ができず、坐骨神経痛のような別の病気が原因で痛みが出ている可能性もあり、様子を見ながら、あまりにも強い痛みが続くようだったら、近所の整形外科を受診するように勧められまし

た。今日もまだ、立ったり、歩いたりすると痛みがあります。もうしばらく様子を見て、必要と思ったときは、前に膝の骨折で入院したときの、大津にある整形外科に行こうと思っています。

いまのところ、それ以外に副作用と思われる症状は出ていません。お薬は、カロナールと、ロキソプロフェンとそれに対応する胃薬の三種類を毎食後服用しています。その効果があって、この治療が引き起こす膀胱炎の症状を遮断しているものと思われます。

九月二日と一〇月六日のあと二回で、この BCG 注入の治療は終わります。副作用が出ない人はいないといえます。また、その症状も人によってまちまちのようです。向き合って、何とか、あと二回を乗り切りたいと思います。（九月）

二六．喜寿の誕生日を三箇月後に控えて

わがいのち 受けてこのかた 喜寿の今日
空となりにし この身喜ぶ

わがいのち よくぞここまで 保ちけり
死につつ生きて 生きながら死す

わがいのち 散るにまさるは 何もなし
ながらえるより いまここに辞す

草原も 静かにそして 厳かに

いまここに いよいよ昇る 月のなか

生かされし わが身を胸に 旅立ちぬ（九月）

二七．副作用ではなく脊柱管狭窄症でした

少しまだ痛みが続いていましたので、昨日、かつて膝の骨折で手術し入院したことのある整形外科を訪ねました。レントゲンの結果、脊柱管狭窄症による痛みであることがわかりました。BCG 膀胱内注入による副作用にみられる関節炎の痛みではありませんでした。

私の場合この痛みは、立ったり、歩いたりするときに現われます。しかし、座っているときや、車の運転をしているときには現われません。つまり、椅子に座ってパソコンに向かっているあいだは痛みがなく、勉強に支障はないのですが、台所に立ったり、掃除機を使ったり、部屋から部屋へ移動したりするときに痛みが走り、つらい思いをします。

二週間分のお薬（プレガバリン OD 錠）を処方してもらい、腰部固定帯も購入しました。初期の症状なので、手術の必要はなく、二週間以内には、痛みは緩和するとの説明でした。また、済生会熊本病院の主治医の先生宛てに、病状に関するお手紙（診療情報提供書）も書

いてもらいましたので、次回の BCG 膀胱内注入をする二二日に、もっていこうと思っています。

早くも薬の効果が出はじめ、痛みが和らいでいます。また、BCG 膀胱内注入治療にみられる、激しい膀胱炎のような副作用も、幸いなことに、いっさい出ていません。本当にありがたいことです。（九月）

二八．膀胱がんステージⅠの治療完了

二回の TURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）と六回の BCG 膀胱内注入治療が終わりました。これでもって、膀胱がんステージⅠの標準的治療が完了しました。本来であれば、あるいは、論理的には、これですべてのがん細胞が死滅し根治したことになります。しかし、膀胱がんの場合は、再発率が非常に高く、それを早期に発見するために経過観察が必要とのことで、この経過観察は二本立てで行なわれます。ひとつは、採尿によりがん細胞の有無を調べる検査です。もうひとつは、尿道からファイバースコープ（内視鏡）を入れて、直接膀胱内を見る検査です。これから約二年間、だいたい三箇月おきに、これらによる観察が進められてゆきます。主治医によれば、私の場合の再発率は、およそ五割だそうです。再発を防ぐための、食事や運動などに関する事前の予防法もなく、すべては天の配剤にゆだねるしかありません。もし再発が認められた場合は、最初にもどって TURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）により、がん細胞を削ることになります。一回目の経過観察のための検査が、二箇月後に予定されました。もうもはや、私は、自身の努力やこころがけでは、いかんともしがたい状況にあります。昨夜は中秋の名月でした。月や星は、私のいのちの行く末を知っているのでしょうか。私に残されているのは、何も考えず、無になって、日々の勉強と生活を続けることだけです。（一〇月）

二九．高齢者への温泉入浴料の助成

私の住む高森町では、だいたい二週間ごとに回覧文書が出ます。私のような外部から移住してきた新参者は、昔からの集落単位の行政区に所属することは嫌われ、したがって、回覧文書も役場に取りにいくことになります。先日受け取りにいった回覧文書の一つひとつ、自宅に帰って眺めていましたら、「高齢者温泉施設入浴料助成事業の実施について」というお知らせが目につきました。内容は、高森町内とお隣りの南阿蘇村にある温泉施設の入浴料金の一部を助成するというものでした。具体的には、高森町にある休暇村南阿蘇の温泉については、私は高森町民ですので、いま一回五〇〇円で利用していますが、町が今後二〇〇円助成することによって三〇〇円になり、一方、南阿蘇村にある白水温泉瑠璃と久木野温泉四季の森のふたつの温泉につきまして、村民外である私の場合は、これまで一回六〇〇円でしたが、これが二〇〇円の町の助成により、今後四〇〇円での利用が可能、と書かれてありました。

私のこの地区の温泉とは、長いお付き合いがあります。私が定年と同時にこの地に移り住んだのは、これまで別荘として使用していた小さな家がここにあり、その自然に恵まれた環境のなかで、前立腺がんの治療を終えたばかり私の体を癒したいという思いからでした。そ

れからすでに一二年が立ってしまいました。最初私は、瑠璃温泉に日に二回通いました。しかし、熊本地震後しばらく休館になり、通う温泉を地元の高森温泉館に替えました。すると今度は、町が運営するこの温泉は、入館者不足で閉館となってしまう、再び瑠璃温泉に変更しました。すると、瑠璃温泉までもが、赤字経営に陥り閉館となり、少し遠い四季の森温泉に通うようになりました。やっと慣れてきたころ、確か今年の春のことでしたが、今度は、村外者の入浴料金が、一回五〇〇円から六〇〇円に上がってしまいました。ちょうどそのころ、南阿蘇休暇村が、高森町民の場合、一回五〇〇円で昼間の短い時間帯に開放するというニュースが飛び込んできました。利用時間に制約があるものの、南阿蘇休暇村は、私の家から最も近く、料金も安く、露天風呂からの眺めもすばらしく、迷わずそのときから、南阿蘇休暇村の温泉を楽しむようになりました。

売りに出されていた瑠璃温泉は買い手がつき、最近再建されたようですが、私はまだ一度も行っていない。また、南阿蘇村には、熊本地震で甚大な被害を受け、再建の見通しが立っていない別の温泉もあります。

この一二年のなかにあつて、温泉料金は三〇〇円から高騰を続けてきています。それにあわせて、私の利用回数も、最初来たころの日に二回から、いまの週三回へと、どんどん減少してきました。そうしたなか、今回、町の助成がはじまります。他方でこの間、地震もあり、閉館もあり、追われるようにして、余儀なくもうひとつの温泉へ足を運ばざるを得ない事態に何度か遭遇しました。それによって、いつも身近な話題で盛り上がっていた温泉仲間や受付の人たちとやむなく別れることになり、人の縁が次第に希薄になってゆくものを感じてきました。

一見平和で穏やかそうに見える田舎に、自然災害があつたり、人口減少によって経営が成り立たなくなったりと、日本全体の縮図ともいえる現象が起きているのです。これからもまだまだ、日本の社会的変動の写し絵となって、私の温泉生活も変動し続けてゆくものと思われれます。（一〇月）

三〇．父の絵画作品を写真に撮る

私がいま住んでいる山荘を建てたのは、一九九〇年代のはじめでした。もう三〇年以上も前のことになります。そのころは子どもたちもまだ小さく、春や夏の帰省にあわせてこの山荘に足を伸ばしては、ひとときの自然に囲まれた山暮らしをしていました。私たちが使わないときは、熊本市内に住む両親が、しばしばこの山の家に来て、老後の生活を楽しんでいました。母親は庭いじりが好きで、父親は、近所の風景を写真に収め、実家に持ち帰っては、油絵に描く趣味をもっていました。こうしてできた作品が、実家にはたくさん残されていました。父親が亡くなったとき、その多くは、ゆかりの人たちに受け取ってもらいました。ただ遺作のなかで、自分の関心を引く数点は、この山荘に移動し、父親がこの家に残していた作品とあわせて、十数点を壁に掛けて暮らすようになりました。どの作品も阿蘇の絵で、外も阿蘇、内も阿蘇、まさしく阿蘇一色の空間となりました。しかし、これらの絵を見ながら、私の死後、この作品たちはどうなるのだろうと、ときどき考えるようになりました。そこで、とりあえず写真に撮り、紙に焼いたものと、デジタル化されたデータとでもって、保存することにしました。いつ、どういう方法で撮影をするか悩んでいた、ちょうどそのと

きです、私のマイナンバーカードについての更新の知らせが届きました。更新申請書には所定の大きさの顔写真を添付する必要があります。そこで、いいタイミングだと思って、近くの写真館で、顔写真だけでなく、この家にある父親の遺作のほぼすべてを撮影してもらうことにしました。そのとき私の肖像写真もお願いしました。遺影にするためです。これらすべて、終活の一環です。いま私の頭のなかには、近づく死を前に自分がなさなければならないことが、幾つも刻まれており、意識的なのか無意識的なのか自分ではわかりませんが、タイミングに遭遇すれば、それに引きつけられるようにして、ひとつずつ実行しているようです。（一〇月）

三一．「中山修一著作集」の更新

「中山修一著作集」を更新しました。前は二月でしたので、この間九箇月が立っていました。振り返れば、この間の九箇月は、私にとって、少し大げさにいえば「死闘」の日々でした。膀胱がんが確定し、五年生存率が七割か八割であることを知ったときは、二、三割の確率で自分も五年以内に死ぬ運命にあることを覚悟しました。死を覚悟するのは、はじめてのことです。しかし、受け入れなければなりません。幸いなことに、それまでに少し時間がありそうです。最大の課題は、いま住んでいる家と家財をどう処分するかです。負の財産を子に遺すことはできません。そう考えると、少し元気なうちに、わずかな身の回りの品だけをもって老人ホームに入り、この家が無償で譲り渡すか、その受け手が見つからなければ解体するしかありません。こうして、私の終活は本格化してゆきました。

しかしながら、実際は、なかなか体がついてきてくれません。二度の手術と六回にわたるBCG 溶液の膀胱注入が、頻尿と尿漏れを誘います。ほぼ同時に発症した脊柱管狭窄症が、激しい痛みをもたらします。八方が完全にふさがれた状態でした。しかし、不思議なことに、人間の体には、自分で元の体にもどろうとする復元力があるようです。それと、症状を緩和しようとする薬剤の効果も大きく働きます。徐々に徐々に回復に向かってゆきました。そうしたなかでの著作集の更新でした。全二六巻を眺めると、少しずつ空白部分が埋められてゆくのがわかります。完全に埋められて、全巻が完結するのに、少なくともあと八年が必要です。完結まで生きて執筆ができるか、誰もわかりません。しかし、今回の更新は、ゴールへ向けての一歩であることは間違いありません。そこに喜びを感じます。

新しいマイナンバーカードができたとの知らせが役場からありました。役場で受け取ると、次回の更新は一〇年後とのことでした。私がふと、「それまで生きているだろうか」と漏らすと、その女性職員は、「大丈夫ですよ」といいながら、両手で私の手を握ってくれました。（一一月）

三二．歯が痛む

膀胱がんと脊柱管狭窄症に苦しむ私に、今度は歯の痛みが加わりました。痛みは、左の上下の奥歯です。それと上の奥歯に内接した頬の内側にも痛みがありました。私は元来歯の治療は苦手で、しばらく様子を見ていたのですが、我慢も限界に達し、近くの歯科医院に駆け込みました。予約もないままの受診でしたので、一時間ほど待ちました。診察用のイスに座

ただで、血の気が引いてゆく感じに襲われます。その間、口のなかの診察と、全体の歯のレントゲンと写真撮影がありました。医師の見立ては、上の奥歯は虫歯で、下の奥歯は、根の部分が残っているものの、上の部分は欠損しているとのことで、両方とも抜歯した方がいいだろうということでした。一方、頬の内側の痛みは、上の奥歯の先端が常時触れることによって発生する痛みと思われるが、しこりもあるので、腫瘍も考えられ、痛みが続くようだったら、口腔外科を紹介するとのことでした。この日は、上の奥歯の先端部分を削る処置をし、この歯を抜く、次の来院日を予約することで終わりました。

抜歯の予約日が来ました。ほぼ予約時間どおりに診療がはじまりました。医師の説明では、虫歯であるため、途中で歯が折れる可能性もあり、折れた場合は、その後それに続いて根の部分の抜くことにするということでした。麻酔を終え、抜歯がはじまりました。もう私は生きた心地がしません。半分意識がなくなっていたように感じます。医師から声をかけられ、無事一回で根っ子まで抜けたということで、その歯を見せてくれました。痛みもほとんどなく、出血も同じくほとんどありませんでした。なぜ生きた歯が、すっと静かに抜けるのか、その理屈がわからず、恐怖感が全身を襲っていたのかもしれない。

今日は、炎症を止める抗生物質と痛み止めロキソプロフェンが処方され、抜糸と消毒の次の予約を入れて、終了しました。

抜いた歯も、残っている下の歯も、痛みがありません。頓服として処方された痛み止めは使う必要はないようです。また、頬の内側の痛みも取れています。やはり、虫歯の奥の歯との接触が原因だったようです。これで、口腔がんの疑いはなくなりました。（一月）

三三．経過観察で再発発見か

膀胱がんステージⅠの標準的治療である、二回の TURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）と六回の BCG 膀胱内注入治療が終わり、いよいよ、尿道からファイバースコープ（内視鏡）を入れて、直接膀胱内を見る経過観察に入りました。これから約二年間、だいたい三箇月おきに、この観察が進められてゆきます。

一回目の経過観察のために病院に行きました。主治医の先生とモニターを見ながら膀胱内を見ます。どうも腫瘍ができています。診察室にもどり、その画像を指さしながら、がん再発の疑いがあることを告げられました。再発率はおよそ五割と聞いていたので、悪い方の目が出たことになります。それにしても、一回目で再発とは、思ってもいなかったもので、少々ショックを受けました。MRI などの手術前の検査の日と、入院の日程が決まり、その日は帰宅しました。

一二月一日に、手術に先立つ検査を行ないました。血液検査、尿検査、心電図、MRI、レントゲンなどです。しかし、どの検査の結果においても、がんを疑うに十分な因子は確認することはできませんでした。主治医の話によると、先日内視鏡で見た腫瘍は、がんではなく、膀胱炎などの炎症でできた腫物の可能性も排除できないということでした、しかしながら、TURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）の手術は、予定どおり、一九日に行なわれます。三泊四日の予定での入院です。三回目の手術となりますので、だいたいの様子はわかっているとはいえ、やはり一抹の不安は残ります。

手術後、削除した細胞は病理検査に出されます。その結果、単なる良性の腫瘍か、いまま

でどおりのステージⅠのがんか、さらに進行したステージⅡのがんかが判明します。おそらく、年が明けた通院日に、それが主治医から告げられるものと思われます。

ステージⅠであれば問題ないのですが、もしステージⅡになっていけば、たぶん尿路変更手術を受け、人工膀胱を装着することになるでしょう。これだけは避けたい気持ちですが、ステージⅠからステージⅡへ進む確率は、主治医の説明では1割だそうです。悪い方の目へ振れないといいのですが。こればかりは、心配しても、どうなるものでもありません。一つひとつ、そのときそのときの結果を踏まえながら、最善の選択肢を選んでゆきたいと考えています。（一二月）

三四．「お米券」配布

住んでいる高森町から「生活支援お米券」が支給されることを知り、先日、町役場で受け取りました。この「生活支援お米券」は、千五百円の割引券です。たとえば五キロ四千五百円のお米を町内の指定されたお店で買うときに渡せば、三千円で購入することができるのでした。一二月と、来年の一月、二月、三月の四回、この「生活支援お米券」が一枚発給されます。

私の感覚ですと、この間お米の価格は、ほぼ二倍に跳ね上がりました。お米は主食ですの、食べないわけにはいかず、この高騰は家計を圧迫します。なぜ、こんな値上がりを招いたのでしょうか。もうこれが通常の値段となり、元にもどることはないのでしょうか。「生活支援」もありがたいのですが、このまま高止まりするのであれば、それにふさわしく給与も年金も上げてほしいと思います。一時しのぎの「生活支援お米券」では、根本的な解決にはならず、焼け石に水になってしまう可能性の方が高いような気がします。（一二月）

三五．民生委員の交代

一昨日、三年の任期が切れたということで、新しい民生委員の方を連れて、引継ぎの紹介に来られました。ひととおりの話が終わると、話題は、私の足のことへと移りました。

いうまでもなく、脊柱管狭窄症による足の痛みについてです。私の場合は、椅子に座って勉強することにも、車を運転することにも、ベッドで十分な睡眠をとることにも、支障は出ていません。ありがたいことだと思っています。しかしながら、歩くのに少し不自由をしています。室内での歩行はもとより、買い物や銀行や役場などで、駐車場から目的地までの歩きに痛みが伴うのです。杖をつきながら、半歩半歩の歩みとなります。階段を昇るときや重い物をもつときは、その痛みは倍増します。ときには話しかけてくる人や手を貸してくれる人もいます。膀胱がんの治療をしている大きな病院では、車椅子の対応をしてもらえます。

私の歩く姿を見て、新旧の民生委員の方から、高森町の地域包括支援センターへ、私の足の具合について報告をしておくというお言葉があり、その日は、お帰りにになりました。

その数日後、地域包括支援センターの職員の方がいらっしゃいました。その日は、介護保険制度について、支援や介護の認定について、高森町と、お隣の南阿蘇村の老人ホームについてなど、いままでにほとんど知ることのなかった、さまざまな貴重なお話を聞く機会となりました。年が明けたら、とりあえず、「白水高原ホテル」という名のかつての温泉ホテ

ルが改装された、南阿蘇村にある有料老人ホームを見学する方向で、アレンジしてもらうことが決まりました。

膀胱がんがステージⅡに進み、人工の膀胱を装着するようになれば、また、脊柱管狭窄症の痛みがさらに強くなって続くようであれば、いまの生活を維持することはできなくなるにちがいありません。最悪の状況になる前に、早目の対応が必要であると考えた次第です。ここへきて、少しずつ、私の晩年の生活が動き出している感じがしています。未知の霧に包まれながら……。 (一二月)

三六．三回目の切除手術完了

すでに書いていますように、血液検査、尿検査、心電図、MRI、レントゲンなどの術前検査の結果では、がんを疑うに十分な因子は確認することができませんでした。主治医の話によると、先日内視鏡で見た腫瘍は、がんではなく、膀胱炎などの炎症でできた腫物の可能性も排除できないということでした。しかし、TURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）の手術は、予定どおり、一九日に行なわれました。三泊四日の入院でした。

手術によって切除された細胞は病理検査に出され、その結果、単なる良性の腫瘍か、いままでどおりのステージⅠのがんか、さらに進行したステージⅡのがんかが判明します。おそらく、年が明けた一月五日の通院日に、それが主治医から告げられるものと思われます。

こればかりは、心配しても、どうなるものでもありませんので、一つひとつ、そのときそのときの結果を踏まえながら、最善の選択肢を選んでゆきたいと考えています。

この入院で、ひとつ感動的な経験をしました。退院の前日の夕方、病室のある五階のフロアーを、杖をつきながら歩行訓練をしていたときのことです。南西の行き止まりの非常用の出入り口までたどり着きました。ガラスの扉越しに眼前に見たものは、木原山の全景でした。ここは高群逸枝の少女期の遊び場となっていたところです。私もよく父に連れられて山中の不動尊に参拝した思い出があります。いま私は、その山の容姿のすべてを手取るようにして眺めているのです。感動的でした。

そしてまた、視線を天空に向けると、夕日が、木原山から西の天草、島原方面へと赤々と輝きながら、落ちてゆこうとしている瞬間でした。逸枝の自伝には、こうした夕日を眺めながら、自分も含めて、幼子を背負ったこの土地の子守りたちは、大勢集まって「五木の子守歌」を合唱したと書かれてあります。百年以上前の情景の再来を見るような思いで、沈みゆく夕日を、「五木の子守歌」をこころで口ずさみながら、じっと見つめていました。今年は、病に悩まされた年でした。その二〇二五（令和七）年も、いままさに暮れようとしています。 (一二月)

第三編 二〇二六（令和八）年——これもよし、それもまたよし

一．最後の年賀状

謹んで新春の御祝詞を申し上げます

昨年は病気に見舞われた年でした。膀胱がんステージⅠの標準的治療とされる、二回のTURBT（経尿道的膀胱腫瘍切除術）と六回のBCG膀胱内注入治療が終わり、いよいよ一二月から、再発の有無を調べるための、尿道からファイバースコープ（内視鏡）を入れて直接膀胱内を見る、経過観察に入りました。これから約二年間、だいたい三箇月おきに、この観察が進められてゆきます。再発率は五割です。ステージⅠの五年生存率は七、八割といわれています。また秋には、激しい痛みを伴い脊柱管狭窄症が襲ってきました。現在、痛みを和らげる五種類の薬を服用しています。机に向かつての勉強や、買い物や通院時の車の運転など、座る姿勢のときには支障はありませんが、歩行の痛みは解消せず、いまだ杖をつく不自由な生活を強いられています。

そこで、年賀状による新年のご挨拶は、これをもちまして最後とさせていただきます。この間ちようだいしましたご厚情に対し、みなさまお一人おひとりに、こころから感謝の言葉を申し添えます。ありがとうございました。

穏やかなお正月をお迎えのことと思います。これよりのちのさらなるご多幸とご健康を、ここ火の国大阿蘇の山野から、衷心よりお祈りいたします。

二〇二六（令和八）年 元旦

二．がんにあらず、回復の兆しあり

予定どおり、一月五日に病院に行きました。病理検査の結果は、「がん細胞の所見なし」というものでした。主治医の先生と握手をして喜び合いました。

しかし、年末の三回目の手術の少し前から、下腹部に痛みを覚えていました。例えるならば、小さなラグビーボールのような形をした鉛のような異物が、ずっしりと下腹部に陣取っている感じです。椅子に座っているときは、あまり感じませんが、ひとたび立ち上がり、歩こうものなら、その異物から四方八方に痛みが走り、伝い歩きをして部屋を移動するのがやっとという具合でした。

この日、下腹部の痛みについて相談しました。主治医の判断では、これは脊柱管狭窄症から来る痛みではなく、膀胱痛ではないかということで、抗生物質を処方してもらいました。この間の経過を報告するために二週間後にまた病院に行きます。抗生物質の服用によって、それまでに完全に下腹部の痛みが和らぐといいのですが。

そうした思いのなか、予約を入れていた二週間後の一月一九日に病院に行きました。まだ痛みが残っていましたし、この日のエコー検査でも、膀胱に炎症のような形跡が認められました。そこで、さらに二週間後に、念のためにMRI検査で確認することになり、その日の予約を入れて帰宅しました。

帰宅後から、主治医の勧めがあつて鎮痛薬の服用を再開しました。この薬は、脊柱管狭窄症を緩和するためにかかりつけの整形外科によって処方されていたものですが、下腹部の

痛みが脊柱管狭窄症に由来するものではないとの判断から、自主的に服用を中断していた鎮痛剤です。すると、一週間を待たずして、痛みが次第に和らぎ、室内は杖なしでも移動が可能になってきました。また、街に下りて買い物をしたり、休暇村の日帰り温泉を楽しんだりすることもどうにか可能になりました。本当にありがたいことです。

しかし、尿漏れは落ち着いてきたものの、頻尿はほとんど改善されず、夜間でも、一時間前後で尿意が訪れる状況です。これでは安定した睡眠が約束されず、生活の質を損ないます。何とか、二月二日の次の通院日までには、こうした症状が完全に解消し、MRI 検査でも、何ら問題が確認できないまでに改善できることを強く望んでいます。そうなれば、この強度の膀胱炎から解放され、三箇月に一度の、内視鏡を入れてのがん再発の有無を調べる経過観察へと再びもどることになります。早くそうなって、かつての生活と勉強を取り戻したいというのが、いまの願いです。

もっとも、この間の長い痛みのせいで、作業能力や判断能力のようなものが低下しているように思います。また、虚脱感や疲労感も感じています。勉強にしても生活にしても、あまり先を急がないで、少しこの時期、体を休めるのもいいかな、とも思っています。（一月）

三. 今年も雪が

今年も雪が降り、家に閉じ込められることになりました。

健康なときは、四方を雪で覆われそうな予報を聞くと、あらかじめ事前に、家から一キロくらい牧野道を下ったガードの下に車を置き、その坂道を徒歩で上り下りしながら、車を使って街に出たものですが、数年前に膝を骨折して手術をして以来、雪道が肉体的にも精神的にも受け入れることが困難になり、完全に雪が融けきるまで、家で過ごすようになりました。今年はそれに脊柱管狭窄症の痛みや膀胱痛が加わり、歩くこと自体が不自由になり、当然ながら、家での雪消待ちとなりました。

家のなかには、エアコンの暖房とガスファンヒーターのおかげで、寒さ知らずの快適さです。ウッドデッキや庭の木々を眺めては、覆われた白銀の雪景色を楽しみます。積もっていた雪も二日目ころには徐々に消え始めましたが、坂道は凍結している恐れもあり、念のために、もう二日間家で過ごし、やっと五日目に街に下りてみました。街は雪の形跡はほとんどなく、スーパーも銀行も郵便局も、人びとの普段の生活で暖かい活気に満ちていました。家に帰って周囲を眺めると、まだ雪があちこちで積もっています。いまだここは厳冬進行中なのです。街と山の違いがここにもくっきりと現われているのを実感します。

もうすぐ二月です。この月に入ると、庭に積もった残雪をかき分けるようにして、例年、黄色い福寿草が顔をのぞかせます。（一月）

四. 春めく、例年より早く

二度目の積雪に見舞われました。しかし今回は、雪の量も少なく、外出せずに様子を見ながら家で過ごしたのは、わずかに二日間ですみました。少し拍子抜けの感じでした。

雨が降ってきました。残雪や根雪を融かします。道路も庭もウッドデッキも、地肌が見えてきました。暖かい空気が流れます。一週間の気温の予報を見ると、今日からの最低気温は、

氷点下を脱しています。この数字に接するだけでも、こころが軽くなります。春めいてきた感じです。例年より早いです。今後寒の戻りがあるのでしょうか。それとも一気に春になるのでしょうか。

勉強から少し遠ざかっていました。その間、いつ再開できるのか、たとえ再開できても、いままでどおり文が書けるのか、内心不安が渦巻いていました。しかし、徐々に痛みも緩和してきました。短い距離であれば、歩行もできるようになりました。積もった雪の融解に似て、不安も溶け出し、少しずつ書きたい文が私の指先に伝わり、パソコンのキーをたたいています。ああ、まだ書けるんだ——喜びが込み上げてきました。（二月）

五. 回復の兆しが見えてくる

昨日、病院に行ってきました。

この間病理検査に出していた尿の結果は、がん細胞も、炎症の原因となっていると考えられる細菌も、見出せなかったというものでした。また、先週金曜日に撮影した全脊椎の MRI も、骨への転移は、認められなかったという結果でした。

心配していた事態は、これでひとまず回避できました。しかし、主治医の判断で、念には念を入れて、もう一度、二週間後の三月二日に膀胱と恥骨周辺の MRI を撮りたいということでした。もしこの段階で問題がなければ、やっと、三箇月おきに膀胱内に内視鏡を入れて再発の有無を確認する経過観察にもどることになります。

主治医にとって、理解できなかったことは、なぜあのような強い痛みが出たのかということでした。しかし、がん細胞が尿に混じっていないことは、現在、膀胱にがんはなく、痛みが緩和したということは、骨への転移による症状ではなかったことを意味します。転移していれば、痛みは続きます。先生の判断は、六回の BCG 注入の副作用による炎症反応と思われるというものでしたが、これだけの痛みは、極めてめずらしい症状ということでした。

振り返れば、二回の切除手術後の、六回に及ぶ BCG 注入による治療が終わり、一回目の経過観察を受けたのが昨年の一二月一日でした。その結果を受けて、一九日に三回目の切除手術に臨みました。しかし、そのころから、脊柱管狭窄症に由来すると思われる足の痛みは緩和したものの、下腹部の痛みが現われ、歩くこともできないほどで、これまでの生活が一変しました。加えて頻尿も尿漏れもあり、先の見えない状況に立ち入りました。年が明けた五日の診察での主治医の説明では、年末の手術によって切除した部位からはがん細胞は確認できなかったというもので、ほっとしたものの、痛みは、いっこうに治まる気配はなく、その後、腹部エコー検査、尿検査、MRI 検査が繰り返し続き、今日に至りました。

現在、痛みはまったくなく、杖も必要としないようになっています。買い物も調理も、ウォーキングも温泉も、そして勉強も、ほぼ従来どおり行なっています。ただ、頻尿と尿漏れがまだ続いています。膀胱の活動がもとどおりになれば、それも回復するのではないかとというのが主治医の所見です。

最終的には三月二日の判断まで待たなければなりません。私の気持ちとしては、完全に回復したものと思っています。（二月）

六．住宅型有料老人ホームを見学する

私が住む町の地域包括支援センターの職員の方の案内で、隣り村にある住宅型有料老人ホームの見学に行きました。ここは、かつて温泉ホテルだったということで、二階建ての外観は、高原の山小屋を彷彿させるオレンジ色を基調とする瀟洒なたたずまいを見せていました。一歩中に入ると、暖炉をもったロビーがあり、イスやテーブルがほどよく配置され、入居者同士の歓談の場になっていました。隣りの空間は食堂で、大小のテーブルとイスが、思い思いに並べられ、カウンター奥の壁面のボードには、色とりどりのカップやお皿が飾られていました。また、一角の畳敷きのコーナーには、いまの季節にふさわしく、雛飾りがしつらえてありました。

ロビーと食堂の南東の面は、すべてガラスの壁と扉で外界と仕切られ、そこから、天空に昇ってゆく午前の朝日が、差し込んでいました。外界は広々とした芝生で、足湯を楽しむ露天の湯場や、家庭菜園用のビニールハウスも見て取れました。

対応していただいた職員の方の説明によりますと、いま、女性八名、男性五名が入居しており、その多くは、こうした、他の施設にはみられない、取り巻く自然環境の豊かさや、潤沢な内部空間の良質性が、入居の決め手になっているとのことでした。また、浴室の湯が、天然温泉水であつたり、外来者のためのゲストルームが備わっていたりすることも、魅力になっているとの説明でした。実際、入居者のなかには、東京や福岡などの都会から移住して老後の時間を楽しむ方もいらっしゃるようで、自然の安らぎや地方の暖かさが、世代を超えて人のこころをとらえていることが、ここでも見てわかりました。

最近立て続けに居住者が亡くなられて、現在空室になっている四室と、共同浴室、それにゲストルームを見学させてもらいました。居室はいずれも広く、共同浴室も、障害の度合いによって対応できる、ふたつの浴槽で構成されていました。

料金のことや生活の実態などについて、詳しくお聞きしたかったのですが、その日は、理事長も施設長も所用があつて不在とのこと、後日の電話での問い合わせか、再度の訪問に譲ることになりました。

この老人ホームは、私の家から車で一〇分くらいのところにあり、ときどき前の道を通って、見知っていたのですが、内部に入るのは今回がはじめてでした。ゲストルームでの体験宿泊や食堂での食事体験も可能とのこと、ぜひ近いうちに遊びにきてほしいというお言葉に送られて、この日は玄関をあとにしました。（二月）

七．老後指南の本数々

老後をどう過ごすか、それを指南する本が、あふれているような気がします。内容は、大まかにいえば、定年後の仕事のこと、食事や栄養管理のこと、健康や医療のこと、老後資金や資産の遺し方に関するもの、葬儀や墓のいまの事情に関するもの、といったところでしょうか。

こうした内容をもつ案内書が多く出回るということは、それに関心をもつ読者が多くいることを表わします。ひと昔前は、青春をいかに生きるべきか、恋愛とはいかなるものか、自己実現とは何をいうのか、といった若者向けの案内書が多く世に出ていたように思います。そのことからしても、やはり今日に至るまで、老人人口が増え続ける一方で、若者の数

が激減していることがわかります。

個人の生活が重視され一世帯家族が一般化する前の多世帯家族にあつては、老人の生き方についての話題は、これほどまでににぎわいを見せていなかったように思われます。老人には配偶者がいて、その夫婦には子どもがあり、孫も含めて三世帯がひとつの家族として同居していたことを考えれば、老人問題は、家族全員で引き受けていたのでしょう。ところが、老人の生き方問題は、老人その人がひとりで抱え込む時代へといまや入ってきたのです。どうやらそれが、老後人生の指南書の洪水を引き起こす要因となっているようです。

老後人生真っ只中を生きる私も、ついつい、周りの人はどう生きているのかとか、老後について人がどういう本を書いているのかとか、そういったことに、全く関心がないわけではありません。その一方で、若いときから、自分の人生くらい、人の意見に惑わされずに自分で決めろ、といった具合に歩いてきたこともあり、ついつい自己肯定的で自己満足的な流れに沿って身を処す傾向にあるようです。これを人は終極の自由というのでしょうか。それとも、極点の身勝手というのでしょうか。そう書いて、ひとりで笑い転げる、ひとり上手な自分がいるのでした。（三月）

八．タイヤ交換

この時期になると、行きつけの整備工場でタイヤ交換をします。地下の倉庫に保管していた四本の夏タイヤを取り出して、車に乗せて持参するのです。オフィスで、出されたコーヒを飲んでしていると、三〇分くらいで交換は完了します。

タイヤ交換のときに、いつも思い出すことがひとつあります。かつて神戸大学に勤務していたころ、デザイン・コンサルタントとして、あるタイヤメーカーに月に一回出向いていたことがあり、そのときのことが懐かしく頭をよぎるのです。

車のタイヤにデザインが必要なのか、それを聞くと人はみな驚きます。確かにタイヤは機能部品として、操縦安定性やノイズなどの観点から、多くは機能の面から決定されます。そうはいっても、タイヤのトレッド・パターンは、無限の可能性を秘めているのです。そこで、いかなるパターンにするか、そのデザインは、タイヤをつくるうえでの重要な視覚上の要素となって力を発揮するのです。

實際上、タイヤのトレッド・パターンは、溝に着目すれば、それが直線的であるか、曲線的であるかによってその違いが生まれます。また、接地面に着目すれば、それが粗の状態で構成されているか、蜜の状態で構成されているかでパタンの印象は大きく変わります。そこでデザイナーに要求されることは、対象となる乗用車の性格に応じたパターンを生み出すことであり、その際、「粗密直曲」の組み合わせの様子が、重要な要素となるのです。つまり、タイヤのトレッド・パターンは、感性和機能の複合模様として成立しているのです。

そのようなことを思い出しながらの今回のタイヤ交換でした。（三月）

九．確定申告と新年度予算編成

私は、毎年確定申告をしています。いつもですと、その時期になると、それに関連する書類が税務署から送られてくるのですが、今年は待っても待っても届かず、役場に行ってその

書類を入手しました。役場の職員の方の話によると、申告を、紙からウェブに切り替えたいという意向が、そこにはあるとのことでした。私個人は、この申告書類に関しては紙派に属します。といいますのも、指示書に記載されている内容に従って自分自身で電卓を使って計算することに、私は、頭の体操と収支の実態把握というふたつの意義を見出しているからです。そうした意義もさることながら、今年も申告したおかげで、つい先日、数千円ではありますが、還付金が指定口座に振り込まれました。

この時期、ひとり暮らしながら私も、本年度の決算と新年度の予算編成をします。エクセルで作成します。横に支出の費目を並べていき、縦に一月から一二月を並べます。各月、「予算」「実績」「バランス」の三項目で構成されます。右端が、月ごとの総計が、最下段に費目ごとの総計が表示されます。たとえば、本年度（二〇二五年度）のガス（プロパンガス）の年間支出は、予算が七万三千円、実績が八万四千円、したがって、バランスとしては、一万一千円の赤字になりました。そこで、新年度（二〇二六年度）の予算編成に際しては、本年度の実績を踏まえて、ガスの費目には八万四千円の予算を計上することになりました。

私が最も重要な指針としているのは、収入である年金の範囲内で予算を組み、それに基づいて実際の生活を営んでゆくことです。といいますのも、年金収入を超えて、老後資金を切り崩すようなかたちで生活をしてしまいますと、いつかは老後資金が枯渇し、最晩年に必要とされる医療費や介護費、さらには施設入居費にも困るようになり、間違いなく老後破綻に見舞われることになるからです。

しかし、最近の物価高は年金生活を圧迫します。わずかに残してある老後資金にも手をつけたくありません。大変困難な時代に入ってきたと、実感しています。（三月）

中山修一著作集 2 4

残思余考——隠者の風花余情（上）

第二部

火の国不死鳥（俳句編）

2026 年 4 月

著作集 24 『残思余考——隠者の風花余情（上）』
第二部 火の国不死鳥（俳句編）
目次

中山修一著作集 24
残思余考——隠者の風花余情（上）

第二部
火の国不死鳥（俳句編）

目次

序に代えて	三
第一編 旅人行雲（二〇二三年／令和五年）	四
第二編 行人流星（二〇二四年／令和六年）	六
第三編 紫陽花と彼岸花（二〇二五年／令和七年）	一九
第四編 福寿草と吾亦紅（二〇二六年／令和八年）	三一

序に代えて

この、著作集 24『残思余考——隠者の風花余情（上）』の第二部「火の国不死鳥（俳句編）」は、著作集 13『南阿蘇白雲夢想』の第一部「詩歌の夢の響き（詩歌集）」を継承するもので、現在、「目次」にもありますように、以下の四つの編から構成されています。

- 第一編 旅人行雲（二〇二三年／令和五年）
- 第二編 行人流星（二〇二四年／令和六年）
- 第三編 紫陽花と彼岸花（二〇二五年／令和七年）
- 第四編 福寿草と吾亦紅（二〇二六年／令和八年）

父親が俳句をつくっていたので、毎月父が買ってくる俳句雑誌が家にあり、小さいころ、私もそれを開いては眺めていました。そうした記憶が、半世紀が過ぎたいま蘇り、自分も少しつくってみようという気持ちになりました。幸いなことに、毎週 NHK の E テレで、俳句の番組が放映されており、そこで提供される兼題に従い、週三句をつくることにしました。この第二部「火の国不死鳥（俳句編）」は、私にとりましての、いわば近年の「心象風景の雑記」です。大事な残像が遠ざかる前に、したためておきたいと思います。さらに今後も続きます。

（二〇二六年初春）

第一編 旅人行雲（二〇二三年／令和五年）

01. 兼題〔虫〕

虫鳴かず 秋の来る日が 疎ましい

虫消えて 音無き空虚 耐えられぬ

虫たちも 空を見るのか 月が在る

（二〇二三年一〇月二七日）

02. 兼題〔七五三〕

七五三 心を揺する 響きあり

七五三 写真館に 足が向く

手に揺られ 家路を急ぐ 千歳飴

（二〇二三年一一月一〇日）

03. 兼題〔冬構え〕

赤も黄も すべて燃やして 冬構え

冬構え 山野に消えし 人の影

庭の木々 身ぐるみ捨てて 冬構え

（二〇二三年一一月一七日）

04. 兼題〔落葉〕

さくさくと 足から伝わる 落ち葉声

落葉の 錦絵踏むなり われの悦

落葉を 集めて燃やし 年終わる

（二〇二三年十一月二四日）

05. 兼題〔手〕

少しずつ わが幼子の 手を離す

ひらひらと 手を差し出せば 落ち葉舞う

手をにぎり 明日また来たと 母は言う

（二〇二三年十二月一日）

06. 兼題〔おでん〕

白き庭 きょうもあしたも おでん鍋

こたつ人 おでん食らって 足伸ばす

おでん見て 何から食べる 湯気のなか

（二〇二三年十二月八日）

07. 兼題〔薬喰い〕

ハンターの 人影多し 薬喰い

薬喰い あと十年 いのち延び

土鍋沸く 森の生なり 薬喰い

（二〇二三年十二月十五日）

第二編 行人流星（二〇二四年／令和六年）

01. 兼題〔氷〕

暖のなか 震えて食らう かき氷

杖をもち 氷張る道 ゆるゆると

軒しづく 氷となりて 門飾り

（二〇二四年一月一二日）

02. 兼題〔寒造〕

寒造り 濁り濁りて 清き酒

寒造り ほのかに見ゆる 紅の君

しんみりと 艶もほどほど 寒造り

（二〇二四年一月一九日）

03. 兼題〔悴（かじか）む〕

悴む手 息を吹きかけ 前を見る

天の月 悴みながら われ照らす

いまここに 取るもの取れぬ 悴めり

（二〇二四年一月二六日）

04. 兼題〔扉〕

扉開け 声をかけるも 返事なし

返事なく 扉を閉めて 上を見る

上に見た 青空にまた ノックする

（二〇二四年二月二日）

05. 兼題〔入学試験〕

雪のなか 試験が終わり 寒椿

春遠し また来る季節に 歩み出す

入学や 親の顔見て 満たされり

（二〇二四年二月九日）

06. 兼題〔針供養〕

しみじみと 折れた針見て 手を合わす

供養針 いまは彼方の 蓮となり

よくやった 今年も廻る 針供養

（二〇二四年二月一六日）

07. 兼題〔海苔〕

きょうもまた 海苔しゃぶしゃぶに 舌鼓

おにぎらず これもおにぎり 海苔を巻く

板海苔の 香りと音に 誘われて

（二〇二四年二月二三日）

08. 兼題 [バス]

ねこバスに 会いたし恋し 夜の道

庭に置く かつての勤め 堂々と

砂利道を ゆらりと揺れて 夢消える

（二〇二四年三月一日）

09. 兼題 [蛙（かわず）]

雨降りて 蛙声出す 庭の池

古池に いまも蛙は いるのかな

見渡せば 蛙といわず 姿なし

（二〇二四年三月八日）

10. 兼題 [蓬（よもぎ）]

もぐさ載せ 線香近づけ 邪気払う

さしも草 燃ゆる思いや いまどこに

草団子 あの色恋し 茶屋に行く

（二〇二四年三月一五日）

11. 兼題 [春塵（しゅんじん）]

春塵を わが身に受けて いまを知る

今日もまた 舞い立つ道を 行きにけり

春塵も わが身も同じ 時の花

（二〇二四年三月二二日）

1 2. 兼題 [父]

抱きしめる われ振り捨てて この子らを

思えども 何を遺そう この子らに

いま父は かなたで何を 思いしか

（二〇二四年三月二九日）

1 3. 兼題 [石鹼玉（しゃぼんだま）]

うるわしき 都大路の しゃぼんだま

七色に 丸く膨らみ 空に舞い

音を立て はじけて消える 夢もまた

（二〇二四年四月一〇日）

1 4. 兼題 [クローバー]

クローバー 編みし王冠 誇らしく

幸せを 探し四葉の クローバー

野に一面 花一匁 クローバー

（二〇二四年四月一七日）

1 5. 兼題 [菜の花]

菜の花の その名はいまも 春の色

タンポポも 菜の花もみな いのち色

山桜 菜の花畑 村の道

（二〇二四年四月二四日）

16. 兼題〔辛夷（こぶし）〕

こぶし咲く 山野を歩く この春も

森のなか 白く大きな こぶしかな

目立たない 目立ちたがる わがこぶし

（二〇二四年五月一日）

17. 兼題〔風薫る〕

風運ぶ 緑の香り 届く朝

新緑の 窓辺の朝に 風薫る

風薫る いまカーディガンを 脱ぎ捨てる

（二〇二四年五月八日）

18. 兼題〔草笛〕

誇らしく 草笛吹いて 前に出る

幼日の 笛吹き童子 いまいずこ

草枯れて それに代わるは 口笛か

（二〇二四年五月一五日）

19. 兼題〔穴子〕

茶碗蒸し 天井もよし 穴子かな

焼き穴子 うなぎに負けじ 精を出す

どんぶりを はみ出し勇む それ穴子

（二〇二四年五月二二日）

20. 兼題〔電車〕

花電車 いまは昔の 大輪か

万国の 電車を使う わが市電

久々に 窓から眺めむ 世の流れ

（二〇二四年五月二九日）

21. 兼題〔万緑〕

万緑の 山野に生きる いのちかな

いまここに 生きる恵の 万緑野

見渡せば ああ万緑に 小雨降る

（二〇二四年六月五日）

22. 兼題〔植田〕

田に見ゆる 白鳥の雄 いまわずか

音を立て 水引く田には 人まばら

田も荒れ コメはいずこの 国からか

（二〇二四年六月一二日）

23. 兼題〔鮎〕

鮎跳ねて しぶきのなかに 絵師ごろ

爛をつけ 囲炉裏の鮎に 友を呼ぶ

鮎釣りの 幼子隠れ 蟹探し

（二〇二四年六月一九日）

24. 兼題〔蜜豆〕

豆含み それから次に 蜜の味
果物に さらに賑わう 豆と餅
蜜豆と 無邪気に遊ぶ スプーンかな

（二〇二四年六月二六日）

25. 兼題〔木漏れ日〕

木漏れ日を 浴びて語りて 時流る
木漏れ日が 射して通るや 樹々の森
木漏れ日に 手を差し伸べて つかみけり

（二〇二四年七月三日）

26. 兼題〔蛇〕

開けてみた 郵便受けに とぐろ巻く
悠然と ウッドデッキの 手すり行く
お互いの 尾を食む二匹 太古から

（二〇二四年七月一〇日）

27. 兼題〔目高〕

久々に メダカを見つけ 持ち帰る
日光を 浴びて輝く メダカあり
生まれし子 食べて悠々 親メダカ

（二〇二四年七月一七日）

28. 兼題 [涼し]

続く雨 涼しさ遠く 森の家

秋来たり ころろを占むる 涼の風

山のなか 静かに涼し 人はなし

（二〇二四年七月二四日）

29. 兼題 [母]

誰しものが 母から生まれ それ思う

西の空 茜色射す 残り陽に

われ遣り 母を思わん その色に

（二〇二四年七月三一日）

30. 兼題 [プール]

夏空の 青がプールに 映りけり

子の声と セミの鳴き声 重なりて

しぶき揚げ 見守る母は 傘のなか

（二〇二四年八月七日）

31. 兼題 [天の川]

地の川を 映し出したる 天空の

悠々と 流れ輝く そのなかを

われ独り 渡りて遊ぶ 夏の夜

（二〇二四年八月一四日）

32. 兼題〔西瓜〕

ああ西瓜 昔日常 いま貴重

ああ西瓜 それでも食べる 夏恋し

夏終わり 西瓜も消えて 秋は来ぬ

（二〇二四年八月二一日）

33. 兼題〔秋風〕

ひんやりと 夏の終わりに 肌に来る

しみじみと 終わりを告げる 秋の風

さわやかに 秋のひと風 舞にけり

（二〇二四年八月二八日）

34. 兼題〔桃〕

桃割れに 大人の気配 漂わせ

巡りくる 桃の節句に 時思う

桃太郎 いまのこの世に あらんかな

（二〇二四年九月四日）

35. 兼題〔虫〕

おお無常 いまの庭には 虫はなし

ああ悲し 虫なき庭に 何求む

にぎやかに 虫鳴く庭の 懐かしき

（二〇二四年九月一日）

36. 兼題〔花野〕

アザミの野 黄色い蝶が 飛び回る

静けさに わが手を伸ばす 秋の原

われ独り 花野の上に 大となる

（二〇二四年九月一八日）

37. 兼題〔座る／座す〕

野に座せば 伝わる土の 香りかな

秋に座す 色とりどりの 花模様

魚跳ね 川面の岩に 腰掛ける

（二〇二四年九月二五日）

38. 兼題〔ふるさと／故郷〕

ふるさとを いつしか思う 年になり

ふるさとに 帰る楽しさ 恥ずかしさ

ふるさとと いまともにある わが身かな

（二〇二四年一〇月二日）

39. 兼題〔夜食〕

健康に 早寝早起き 夜食なし

月眺め 酒と餅に 手を伸ばす

懐かしき 母がつくりし 夜の食

（二〇二四年一〇月九日）

40. 兼題〔秋茄子〕

秋に茄子 七輪出して 生姜擦る

ざるに載せ 秋のなすびの おすそ分け

秋茄子を 辛子に漬けて 味愛でる

（二〇二四年一〇月一六日）

41. 兼題〔栗〕

山道に 落ちた栗見る ああ一年

イノシシが いがを残して 食べにけり

栗ご飯 栗ぜんざいも この季節

（二〇二四年一〇月二三日）

42. 兼題〔蓑虫〕

蓑虫の 蓑をまねして 傘を編む

蓑虫や 自作の家に 顔を出し

糸揺れて 蓑虫の家 地に落ちぬ

（二〇二四年一〇月三〇日）

43. 兼題〔渡り鳥〕

渡り鳥 流れ流れて 律儀にも

渡り鳥 海を旅路に 南国へ

大空を 群れて仲よく 渡り鳥

（二〇二四年一一月六日）

44. 兼題〔梟（ふくろう）〕

梟の その大きさに 見とれたり

梟が 鳴かず話さず 木の上に

梟よ どこからどこへ 行くのかい

（二〇二四年一一月一三日）

45. 兼題〔凧（こがらし）〕

木枯らしに 落ちし葉っぱを かき集め

一輪車 乗せては運ぶ 谷底に

繰り返す その背を包む 陽の幸

（二〇二四年一一月二〇日）

46. 兼題〔眼〕

鳥の眼も 虫の眼もまた 生きるため

眼を捨てて 手で触れてみる 別世界

心あり 見る眼聞く耳 なかりとも

（二〇二四年一一月二七日）

47. 兼題〔息白し〕

白き息 両手にあてて 暖をとる

息白し 鼻赤しなる サンタ来る

マラソンと 白い息への 白い声

（二〇二四年一二月四日）

48. 兼題〔聖夜〕

満天の 星降る夜が われに告ぐ

キャンドルと 聖なる夜に 身を清む

聖夜には 太古を越えて 舞い降りる

（二〇二四年一月一日）

49. 兼題〔湯豆腐〕

湯豆腐に わが影映り 湯気と消ゆ

湯豆腐の 湯気の向こうに 君がいて

湯豆腐や 片手にもった 赤ワイン

（二〇二四年一月一八日）

自主詠句 01. 年の終わりに

戸を開ける 今年はじめの 白い雪

寒さとして 匂いも色も 放ちけり

生かされし わが身を胸に 旅立ちぬ

（二〇二四年一月二五日）

第三編 紫陽花と彼岸花（二〇二五年／令和七年）

01. 兼題〔双六／絵双六〕

双六や いつかはきっと ゴール来る

双六や いのちまかせる サイコロに

双六も カルタもみんな 冬眠か

（二〇二五年一月八日）

02. 兼題〔初鏡〕

初鏡 今年も見るか わが心

姿見る 前も後ろも 初鏡

初化粧 紅引く筆に 折り込め

（二〇二五年一月一五日）

03. 兼題〔寒椿〕

竹藪に 二輪交わり 寒椿

雪が舞う わが庭の華 寒椿

寒椿 咲いて短い いのちかな

（二〇二五年一月二二日）

04. 兼題〔コーヒー〕

喫茶店 いまはコンビニ 紙コップ

豆を挽き お湯を注いで さあどうぞ

コーヒーや 香りと味と 黒に酔う

（二〇二五年一月二九日）

05. 兼題〔薄氷（うすらい）〕

薄氷を 割って食べたる 陽だまりで

薄氷を 足でたたいて 水遊び

薄氷を 手にして落とす モンスター

（二〇二五年二月五日）

06. 兼題〔春セーター〕

春色の 買ったセーター まだ早い

セーターに 春を詰め込む ショッピング

セーターを 替えて楽しむ 春の陽に

（二〇二五年二月一二日）

07. 兼題〔梅〕

紅白の かそけき梅の 山に咲く

梅の下 咲く花びらに 暖を見る

残る寒 梅見楽しや 紅と白

（二〇二五年二月一九日）

08. 兼題〔春泥〕

春泥に 身を寄せ合わす 子どもかな

春泥や 今年はじめの 水遊び

雪が融け 水が流れて 土なじむ

（二〇二五年二月二六日）

09. 兼題〔囀り（さえずり）〕

囀りに 目覚めしわれは 巣箱かけ

あちこちに 囀り渡り 森響く

囀るも 山はまた雪 立ち止まる

（二〇二五年三月五日）

10. 兼題〔卒業〕

いまここに 業を卒する 別れかな

卒業は 学婚人の 区切りなり

卒業の 遅い早いの 違いあれ

（二〇二五年三月一二日）

11. 兼題〔田楽〕

田楽や 阿蘇高森に 姿あり

囲炉裏端 つるのこ芋を 焼いて食う

火が起こり いま田楽を 串にさす

（二〇二五年三月一九日）

12. 兼題 [スリッパ]

スリッパや 今日から夏に 衣替え

スリッパの 合わぬ異国の 大男

羽田にて 草履を買いし 異国人

（二〇二五年三月二六日）

13. 兼題無し

見物に 九十九曲り 山ザクラ

山ザクラ 咲いていいかと 聞きにけり

甘酒を お代わり重ね 山ザクラ

（二〇二五年四月二日）

14. 兼題 [アスパラガス]

フキノトウ アスパラガスに 何を見る

大阿蘇や ツクシ芽を出し アスパラ続く

天ぷらは アスパラガスの 一点盛り

（二〇二五年四月九日）

15. 兼題 [海]

舷の下 照らし輝く 海ボトル

八月の 恋する海に 抱かれて

白い帆に 風をはらませ 海の上

（二〇二五年四月一六日）

16. 兼題〔桜・花〕

風吹いて わが家のさくら 舞いにけり

花びらが 庭一面を 隠したり

空から地 薄桃色の 大変化

（二〇二五年四月二三日）

17. 兼題〔燕〕

軒下で 急ブレーキの 親ツバメ

ツバメの巣 土とわらとに 唾液混ぜ

空中で 旋回披露 芸ツバメ

（二〇二五年四月三〇日）

18. 兼題〔麦の秋〕

金色の さらさら揺れる 麦の秋

幼き日 食べた麦飯 とろろかけ

麦の秋 青と緑の 空と山

（二〇二五年五月七日）

19. 兼題〔空〕

青春の 空を見上げて 勇気湧く

探しても 空にあるもの 見つからず

病む体 空も病むのか 聞いてみた

（二〇二五年五月一四日）

20. 兼題〔祭〕

遠くから 祭りのはやし 聞こえる

日暮れて 祭りに集い 綿菓子

思い出は あの日あの夜の 祭りの音

（二〇二五年五月二一日）

21. 兼題〔自転車〕

自転車の 操作伝授の バトン継ぐ

自転車や 歩きを越えて 空を飛ぶ

自転車で きずな深める 父と子の

（二〇二五年五月二八日）

22. 兼題無し

枯木から 葉を出す緑 陽に光り

栗の花 散りて間もなく 梅雨入りか

新緑や 雨に洗われ 輝きぬ

（二〇二五年六月四日）

23. 兼題〔氷水〕

風に揺れ たなびく旗の 「氷」 かな

どれ選ぶ 「氷」 にかける 蜜の色

味よりも 体凍らす かき氷

（二〇二五年七月九日）

24. 兼題〔雲〕

雲流れ 雲たなびきて 雲湧きぬ

見上げても 子のときに見た 雲はなし

どこへ行く どこから来たの その雲は

（二〇二五年七月一六日）

25. 兼題〔滝〕

しぶきあげ 滝に清める 身ところろ

朝もやの 滝音聞いて 目を覚ます

はね返す 肩に重たい 滝水を

（二〇二五年七月二三日）

26. 兼題〔虹〕

雨上がり 東の山に 色の橋

七色の 円弧を描く 幾何模様

誘われて 虹を渡れば そこはどこ

（二〇二五年七月三〇日）

27. 兼題〔残暑〕

暑さ旅 荷物下ろして 足洗う

身ところろ 疲れも半ば 残暑かな

夏過ぎて 向かうはかすか 虫の声

（二〇二五年八月六日）

28. 兼題〔音・声〕

音がする 声がすれども 秋の夜に

月昇り 星流れても 音はせず

何ゆえに 音を聞くのか わが耳は

（二〇二五年八月一三日）

29. 兼題〔踊〕

浴衣着て 太鼓にあわせ 手をたたき

夏の夜の 踊りと屋台 どっち行く

提灯が 触れて取り持つ 夜の灯り

（二〇二五年八月二〇日）

30. 兼題〔友〕

さりげなく 友のなかには 共がある

長い友 短い友も 人生か

友を断ち 自然に生きる 逸枝あり

（二〇二五年八月二七日）

31. 兼題〔案山子（かかし）〕

どこにいる 減ってしまった かかしかな

稲増えて かかし人口 上昇か

虫鳥と かかし戦う 高い空

（二〇二五年九月一〇日）

32. 兼題〔水〕

打ち水に 風鈴鳴りて 夕涼み

湧き水に 両手添わせて 虫が鳴く

洗車して 庭に水やり 風が吹く

（二〇二五年九月一七日）

33. 兼題〔月・名月〕

飴色の 待ちし月いま 昇りけり

月昇り そこに座すのは 逸枝かな

裏山に 満月昇り われ照らす

（二〇二五年九月二四日）

34. 兼題〔芋虫〕

葉に眠る 芋虫君の 明日祈る

月の日に 浴びて育つか 青芋虫

なにげなく のぞいてみれば 芋虫だ

（二〇二五年一〇月一日）

35. 兼題〔新酒・古酒〕

年が明け 新酒祭りの 人に酔う

古漬けに 古酒片手に 古女房

新酒でき 濁りのなかに 舌鼓

（二〇二五年一〇月八日）

36. 兼題〔風〕

風吹いて なびく稲穂に われを知る
山おろし 音もわが身を 射しにけり
風やめば すべてが止まる この世かな

（二〇二五年一〇月一五日）

37. 兼題〔紅葉〕

さくさくと 踏みにしもみじ 地に帰る
われはいま 紅く染まりし 庭に立つ
黄山に 漆黒はおり 紅を引く

（二〇二五年一〇月二二日）

38. 兼題〔会う〕

会えばまた 別れの氷点 押し寄せる
会うもよし 別れもよしと 張りつめる
いつのまに 会いたいつもり 風雨消す

（二〇二五年一〇月二九日）

39. 兼題〔神の留守・神の旅〕

旅いでし 留守を預かる 庭しぐれ
神の留守 そのまにちよいと シカが鳴く
黄と赤の 落ち葉を集め 神の留守

（二〇二五年一一月五日）

40. 兼題 [町・街]

ここは森 街に下りて 会話する

点々と 山から見える 街の灯よ

街は街 森は森にて 異の一語

（二〇二五年十一月二日）

41. 兼題 [時雨]

時雨るか 一枚羽織 空を見る

季節風 時雨を連れて 巻き上げる

通り雨 忘れてしまえ そんなもの

（二〇二五年十一月九日）

42. 兼題 [帰り花]

古木さえ 色ときめかす 帰り花

帰り花 忘れしあの日 墓参道

移り行く 陽の暖を得て 帰り花

（二〇二五年十一月二六日）

43. 兼題 [鷹]

鷹ひとつ 向こうの山に 飛んで行く

今日もまた 鶺鴒の目鷹の目 何探す

速き鷹 目を見開いて 一直線

（二〇二五年十二月一日）

44. 兼題〔石〕

石を積み 橋をつくりて 荷を下ろす

石を投げ 川面にできる 円幾重

石を手に 何に見えるか 自問する

（二〇二五年一月一七日）

45. 兼題〔枯野〕

見渡せば 紅葉散って 褐色野

裏山の 枯野に立って 何を呼ぶ

野が枯れる わが身を眺め 愛おしむ

（二〇二五年一月二四日）

自主詠句 02. わが高群勝太郎に捧げる句

満月に しずくを集め 一献とす

叱られし いまは自由か かぐや姫

逸枝行け かの古代へと 宇宙へと

（二〇二五年一月二五日）

第四編 福寿草と吾亦紅（二〇二六年／令和八年）

01. 兼題〔初詣〕

初詣 雪山眺めて 手を合わす

おめでとう 言葉を重ね 落ち葉焚き

はじかむ手 破魔矢とみくじ 初詣

（二〇二六年一月七日）

02. 兼題〔影〕

弱き陽の 影をけちらす 寒い風

影を踏む 追いかけてこに 汗かく子

影に住む 生き物たちの 別天地

（二〇二六年一月一四日）

03. 兼題〔雪〕

雪降れば 世界が変わり 楽と苦と

しんと 闇夜に積り 夜が明ける

雪のなか 長靴はいて 杖ついて

（二〇二六年一月二一日）

04. 兼題〔海鼠（なまこ）〕

こりこりと 歯ごたえ楽し お正月

寒風と なまこのいのち 寒の岩

海浜の 寒に住まう なまこかな

（二〇二六年一月二八日）

05. 兼題〔猫の恋〕

声上げて 闇夜を崩す 猫の恋

日夜越え 闘い続く 猫の恋

猫の恋 声消えて 離別かな

（二〇二六年二月四日）

06. 兼題〔土〕

土に生き 土に死する 運命に

砂遊び 土いじりの子 いのち満つ

人はみな 土を離れて 生きられぬ

（二〇二六年二月一日）

07. 兼題〔鶯（うぐいす）〕

いまだ雪 春告げ鳥は いまいずこ

ウグイスの 鳴き声遙か 森のなか

枯れ枝に ウグイス色が 春を呼ぶ

（二〇二六年二月一八日）

08. 兼題〔牛乳〕

はじめての 搾りたてなる 牛の乳

幼き日 脱脂粉乳 飲んだっけ

パック入り どこから来たの このミルク

（二〇二六年二月二五日）

09. 兼題〔案山子（かかし）〕

列をなし 案山子が海へ 歩き往く

この土地を 片足立ちで 守る君

鳥たちも 涅槃の案山子 驚きぬ

（二〇二六年三月四日）

10. 兼題〔風〕

吹く風に 身をさらわれて 消えてゆく

風の音 伝わる夜中 電気つけ

風吹けば こころも少し にぎわいが

（二〇二六年三月一日）

11. 兼題〔鳥の巣〕

鳥巣箱 掛けるも悲し 蛇の道

口に草 郵便入れを 鳥の巣に

鳥が舞う どこに赤子は 待つのやら

（二〇二六年四月八日）

中山修一著作集 2 4

残思余考——隠者の風花余情（上）

第三部

白雲に夢想す（短歌編）

2026 年 4 月

著作集 24『残思余考——隠者の風花余情（上）』
第三部 白雲に夢想す（短歌編）
目 次

中山修一著作集 24
残思余考——隠者の風花余情（上）

第三部
白雲に夢想す（短歌編）

目 次

序に代えて	三
第一編 紅紅落葉（二〇二三年／令和五年）	四
第二編 白白雪消（二〇二四年／令和六年）	七
第三編 昇る陽に（二〇二五年／令和七年）	二五
第四編 沈む陽に（二〇二六年／令和八年）	四三

序に代えて

この、著作集 24『残思余考——隠者の風花余情（上）』の第三部「白雲に夢想す（短歌編）」は、著作集 13『南阿蘇白雲夢想』の第一部「詩歌の夢の響き（詩歌集）」を継承するもので、現在、「目次」にもありますように、以下四つの編から構成されています。

- 第一編 紅紅落葉（二〇二三年／令和五年）
- 第二編 白白雪消（二〇二四年／令和六年）
- 第三編 昇る陽に（二〇二五年／令和七年）
- 第四編 沈む陽に（二〇二六年／令和八年）

一年か二年の冬休みに入る少し前に、百人一首に関する小冊子が渡され、それを暗記するのが、この高校の恒例の宿題となっていました。その冊子には、それぞれの歌につき、作者名と解説文が記載されていて、冬休み明けの新学期はじめに、上級者が和室に集まり、かるた取りに興じていました。私自身は、なかなか覚えられず、落ちこぼれ組でしたが、歌の幾つかはいまだ耳に残っており、半世紀が過ぎたいま、自分も少しつくってみようという気持ちになりました。幸いなことに、毎週 NHK の E テレで、短歌の番組が放映されており、そこで提供されるテーマに従い、週三首をつくることにしました。この第三部「白雲に夢想す（短歌編）」は、私にとりましての、いわば近年の「心象風景の雑記」です。大事な残像が遠ざかる前に、したためておきたいと思います。さらに今後も続きます。

（二〇二六年初春）

第一編 紅紅落葉（二〇二三年／令和五年）

01. テーマ [逆転]

振り向けば 遠きかなたに つわものの
泣かず笑わず 足止まりけり

ひたむきに 歩いてみたら 聞こえ来る
見知らぬ人の 清い掛け声

ただ独り 自分を見つめ さらけ出す
夢中不動に 射す光あり

（二〇二三年一〇月二七日）

02. テーマ [天]

見上げれば 天を駆け出す 白馬あり
麦わら帽子 地に落ちにけり

月光を 天に求むる 中秋に
虫も加わり 声援しきり

果てしなき かなたに見ゆる 天空に
白雲夢想 時止まりけり

（二〇二三年一一月一〇日）

03. テーマ [友だちのこと]

いつの日か 会えると思う 秋空に
見える見える 白馬が見える

悲しみの 別れは常に あるものの
慰め虚し 涙流るる

消えてゆく 友の背中を 見つめれば
わが背中には 何が残らむ

（二〇二三年一一月一七日）

04. テーマ [切る]

人と人 切るも切らぬも そのときの
想いの果てに 落ち葉散るらむ

紙を切る 虫がいたいた 夏の日
いまや昔の 夢になりけり

久しぶり 野菜を切りて 肉を切る
今日のカレーは レトロの香り

（二〇二三年一月二四日）

05. テーマ [高速道路]

空に行く 高速道路 その陰で
消えて久しい 大八車

高速を 走る車に 憧れた
いまや懐かし 田舎道

限りなく 時間と距離を 食べ尽くす
新幹線と高速道路

（二〇二三年一月一日）

06. テーマ [ケーキ]

とりどりの 七十五の 蠟燭を
立てては思う わが来し歩み

蠟燭に 息を吹きかけ 消えてゆく
煙となりし わが歩みかな

堂々と ケーキ盛られし 大皿も
切り分けられて 小となるかも

（二〇二三年一月八日）

07. テーマ [パートナーのこと]

さまざまに かたち異なる カップルの
生きる力は 同じなるかも

教科書の 歴史のなかに 残された
偉人の陰の パートナーを探す

いつの世も 姫と彦とが 求むるは
夢幻の 淡きパートナー

（二〇二三年一二月一五日）

第二編 白白雪消（二〇二四年／令和六年）

01. テーマ [光]

東より 初日の光 雲を染め
生まれし疵色 いまたなびけり

早朝に 東の空に 上弦の
光り輝く いのち短し

幾年も 光を浴びる ことはなく
静かに悟り 身を清めけり

（二〇二四年一月一二日）

02. テーマ [あこがれ]

あこがれる 人も物さえ なかりしば
いまそっと見る わが身いとおし

あこがれて 触れてはみたが その果ては
天空回り 裂けたる地面

寒椿 春はいらない 冬に死ぬ
密かに隠れ でも紅をさす

（二〇二四年一月一九日）

03. テーマ [ごめん]

許されて あすは六字の 蓮の上
祖父の座りし 蓮は何処に

許されて きょうはあの山 越えてゆく
山の彼方に 父何を見る

熱き日と 寒かりし日の 交わりに
いまわれ思う 無常の無念

（二〇二四年一月二六日）

04. テーマ [日記]

ありったけ 日記に書いて われを見る
うそも真実 真実もうそ

若き日の 古い日記に 刻まれた
あれもこれもが いま動き出す

苦しさに 倒れて悲し わが心
ものしたためて まっすぐに立つ

（二〇二四年二月二日）

05. テーマ [顔]

顔を見る 顔をそむける さまざまに
まなざし流る ふたりのなかに

けさ起きて 鏡に写る 顔を見て
手を添えにけり ひだ文様に

崩れゆく 顔に自分を 見出して
わが人生の 盛衰を知る

（二〇二四年二月九日）

06. テーマ [傷ついたこと]

傷ついて ふて寝をしても はじまらぬ
それなら起きて 野を駆け回る

幼子が 裸足のままで 泣きながら
どこへ行くのか 髪ふり乱し

虚しくも 傷つけられて 踏まれても
それでもけさは ここに立つなり

（二〇二四年二月一六日）

07. テーマ [助詞「さえ」]

それさえも もたずわからず ここへ来て
いまや問うなり 万有の真

木々に降る 雨さえあれば 新緑の
光り輝く いのちあふるる

流されて 明日のわからぬ わが身なら
せめて星さえ 友とならんか

（二〇二四年二月二三日）

08. テーマ [コンビニ]

コンビニで 声かけられて 振り向けば
チョコを差し出す 店員ありや

さびれゆく 過疎の村から またひとつ
コンビニ消えて 人はもどらず

お別れに 花束もちて 店に行く
思い出しきり 明日の夢また

（二〇二四年三月一日）

09. テーマ [ひとり]

じゃまされず 気兼ねもいらぬ ぬくもりを
ひとり静かに 味わいにけり

寒天に 数ある星に 月ひとつ
照らすこの世は 寂滅となる

恥ずかしき ひとつふたつの 汚点あれ
慰め許す わが身愛おし

（二〇二四年三月八日）

10. テーマ [なぜか忘れられない人]

遠き日の 忘れられない あの人の
アルバム開き 春の陽当たる

しみじみと 思い巡らす 雨の夜は
音のなかにも 景色現わる

さりげなく 振り返り見れば あの時の
夜のしじまに あの人が立つ

（二〇二四年三月一五日）

11. テーマ [組織]

子どもらが みな輪になって 集まれど
いつしか消えて 秋の夕暮れ

組織から 離れてみれば 何がある
輝く星か 見慣れぬ闇か

呼びかけて 集まり散って また次の
朝に現わる いつもの友よ

（二〇二四年三月二二日）

12. テーマ [続き]

とめどなく 続く夢想の 移ろいに
目覚めたわが身 続きのありや

ともすれば 乱れて続く 世の難を
救いし人は 何を語らん

遅々として 前に進まぬ わが歩み
続けることの 意味を説くなり

（二〇二四年三月二九日）

13. テーマ [プラスチック]

不死身なる プラスチックの そのいのち
どこへ流れて 何なさんとす

人工と 不自然の衣を 身にまとい
便利と不滅 プラスチックの怪

錆もせず 割れず燃えずに いまここに
プラスチックを しかと眺むる

（二〇二四年四月一日）

14. テーマ [手紙]

よき人に はじめて渡す 手紙には
生きたすべてが 詰まりにけり

今日もまた ひとつの手紙 待ちわびて
行きき戻りつ 指を折るなり

置き手紙 何を書かんか 開けてみる
言い難しこと 聞き難しこと

（二〇二四年四月一八日）

15. テーマ [アクセサリー]

アクセサリー 並べてみれば 一筋の
歩みし道のり いま懐かしき

アクセサリー 自分を変える 魔力あり
昨日と違う 世界に出会う

かの人に 買って捧げし アクセサリー
どこにあるのか どこに消えしか

（二〇二四年四月二五日）

16. テーマ [はじめまして／こんにちは]

透き通る はじめましての ひとことに
幸いあれと 手を差し出す

こんにちは いかがお過ごし 尋ねます
はるかかなたの わがふた親に

東から 今日が変わらず 聞こえくる
はじめましての 日の光りかな

（二〇二四年五月二日）

17. テーマ [オノマトペを入れる]

ルンルンと こころが踊る 旅の朝
足スタスタと 向かうバス停

早朝の キラキラキラの 川面から
シュッシュと雲が ああ湧きにけり

たどり着き トントン尋ね その先に
ハイハイハイの 美タリズムあり

（二〇二四年五月九日）

18. テーマ [家族]

テーブルに 家族そろいて 膳をとる
いまでも 匂い立つ幸

家族とは 何かと人に 尋ねれば
あればあれにて なくもよしなり

離れたる 家族を思う その時に
行かねばならぬ 魔力生まるる

（二〇二四年五月一六日）

19. テーマ [名残]

風に舞い 積もりて消えし なごり雪
傘を開いて いつまた会わん

申します 雲に隠れて 見えずとも
名残尽きない その夜の月に

目を閉じて 尽きぬ名残の そのなかに
飛び立つ鳥の あすを祈らむ

（二〇二四年五月二三日）

20. テーマ [がんばって／だいじょうぶ]

無理をせず 一步一步の その先に
天空澄みて 星またたけり

つまずいて ひびの入った わが膝に
手を当てては リハビリ耐える

耐え忍ぶ こころの雨は 顔に降り
涙となって 頬伝いけり

（二〇二四年五月三〇日）

21. テーマ [橋]

ある国の ケロケロ橋の 下に住む
老後のふたり 何を話すや

別れ橋 再会橋も あらねども
地獄橋 天国橋も あらむとや

引き裂かれ 橋を渡れば 別の国
わがふるさとに いつか帰らむ

（二〇二四年六月六日）

22. テーマ [嫉妬]

両文字の 左に宿る 偏見に
男の嫉妬 定めし隠れ

男道 女の嫉妬 深くあれ
それに増すなり 男の嫉妬

俗にいう 嫉妬も愛の 化身なら
さらば求めん 異物なき愛

（二〇二四年六月一三日）

23. テーマ [鏡]

早朝の 鏡のような 水面を
鳥鳴いて立ち われ割れ残る

向かい合う 鏡に映る わが姿
表は見えど 後ろは見えじ

手鏡に 映るわが身の 愛おしさ
今日も生きよう 自分の世界

（二〇二四年六月二〇日）

24. テーマ [いつてらっしゃい／いつてきます]

振り向けば いまだ手を振る あの人の
すべてを託し いま旅立ちぬ

さようなら その声なくて 旅立った
失語の病 無念ならざむ

戸口から いつてらっしゃい しめやかに
無事の帰りを 背にまとわせる

（二〇二四年六月二七日）

25. スペシャル 短歌で「光る君へ」を10倍楽しもう！

平安の 君と私を 結ぶのは
テレビのなかの 怪しき言葉

上代の 言葉はどこに 残りけり
語る主役の 口元を見る

生活も 恋も別れも 多々あれど
衣装を読めば わかりぬるかな

（二〇二四年七月四日）

26. テーマ [屋上]

階段を つたって昇る 屋上で
見渡す南 波頭輝く

雷雨来て 干したる衣類 残れども
屋上に見る 虹のすがしさ

屋上に なぜ昇るのか 子が問うと
無口に駆けて 親は答えず

（二〇二四年七月一日）

27. テーマ [旅]

古里は あそこもここも 変わりけり
ただ一枝の 柿に涙す

旅に出て 懐かし人の 姿あれ
かける言葉が 胸に隠るる

さすらいの 流れ者にも 星が降り
なお行かんとす あの丘の果て

（二〇二四年七月一八日）

28. テーマ [休日]

振り向けば 机に向かい ただ独り
休日もなく 文字を走らす

文字を読み 文字を書くわが 仕事とは
働くことが 休息なりや

休みなく 三百六十 五日間
今年も山の 時流れけり

（二〇二四年七月二五日）

29. テーマ [おかえり／ただいま]

おかえりも ただいまもまた 昔ごと
いま聞こえるは 虫の声のみ

玄関で 名を呼ぶ声に 近寄って
ドアを開ければ サル鎮座せり

おかえりに ただいまの声 きょうもまた
家族集まり 卓を囲めり

（二〇二四年八月一日）

30. テーマ [氷]

赤と青 氷屋さんの 店先の
たなびく旗に 手招きされて

ガリガリと かき割る音を 聞きながら
どの蜜にする 隣りをのぞく

キャッキャッキャ 運ぶ氷の 冷たさに
いまこの夏の 寸暇を楽しむ

（二〇二四年八月八日）

3 1. テーマ [色]

色も色 香りも香り 野に咲けば
集まる虫も いとさまざまに

色もなく 香りもなく 土のなか
二匹の蛇 あい睦まじく

雨上がり 空に七つの 帯の橋
誰が渡るや 色消えぬ間に

（二〇二四年八月一五日）

3 2. テーマ [こわいもの]

何もない あるのはひとつ このいのち
どう生きようが どう死のうとも

恐れずに ただひたすらに 前を向き
行く手開けし 海朝ぼらけ

怖がらず 勇気のなかに 真実が
光り輝く 珠となりけり

（二〇二四年八月二二日）

3 3. テーマ [おめでとう／おしあわせに]

結ばれし ふたりの門出 遠く見て
おしあわせにと ふと口ずさむ

おめでとう 何がめでたい この時世
働くだけの 蟻地獄かな

おめでとう おしあわせにの そのなかに
はじめて気づく 愛の黎明

（二〇二四年八月二九日）

34. テーマ [白]

白々と 明けゆく里の 静けさに
山々照らす 赤色の陽々

赤白が 別れていつか 赤赤か
白白だけの 景色になりぬ

白が白 変わらぬ白で あるために
流した涙 幾千粒か

（二〇二四年九月五日）

35. テーマ [文字]

文字なくば わがこころの ありようを
闇に閉ざされ いかになえむ

文字ありて 伝えし思い 文に書き
いつしか友の こだま目にする

床に伏し 筆と辞書は あるものの
なきのごとくに 指かなわざる

（二〇二四年九月一二日）

36. テーマ [鳥]

水を飲む 鳥を見ながら 茶をすする
われの目盗み 飛び立つを知る

皿のなか メジロ軍団 集まりて
押し合いへし合い 水しぶき

鳥の声 いずこに消えし 森のなか
久しく聞かぬ 虫とともに

（二〇二四年九月一九日）

37. テーマ [だいすき／だいきらい]

大好きと 思う人びと 土の中
遺されていて 花を手向ける

大好きな 料理つくりし 夕暮れに
グラスに映る 落日の影

すべて捨て 嫌いなことは 何もせず
かなたを見つめ 深く息する

（二〇二四年九月二六日）

38. 無題

たそがれに 独り踏みしめ 野を歩く
その足音の 響き変わらず

秋過ぎて 鳴く虫もなく 夜のしじま
月も悲しく せつせつと往く

寂滅の 思い密かに 抱ければ
迎える死にも いや光あり

（二〇二四年一〇月三日）

39. テーマ [触れる]

声上げて 砂場に群れる 子どもたち
山をつくりて トンネル掘って

久々に 土に触れたる わが両手
地球の鼓動 いま知りにけり

土遊び 水遊びから 石遊び
遊びは尽きぬ 触れる楽しみ

（二〇二四年一〇月一〇日）

40. テーマ [音]

雨音に 秋の夜長に 目が覚めて
今日も降る降る 虫鳥濡れる

森のなか 姿見えねど 鳥たちの
のどけき音に いのち見えぬる

しっとりと 霞か霧か 朝方の
わが裾濡らす かそけし音が

（二〇二四年一〇月一七日）

41. テーマ [迷い]

信心も 迷いもすべて 夢うつつ
わが身いずこの 花となるかや

暗雲に 自分に帰る 自分なく
人に頼れる 人もなし

たそがれに 道失いし そのときの
耳に聞こゆる 鈴虫の声

（二〇二四年一〇月二四日）

42. テーマ [いただきます／ごちそうさま]

今日もまた いただきますの 合唱で
幼き園児 口を動かす

満腹の ごちそうさまの そのあとは
そろってみなで 皿を洗わん

休みなく いただきますに 間に合って
あっという間の ごちそうさまか

（二〇二四年一〇月三一日）

4 3. テーマ〔飛行機〕

飛び立った 行く手は未知の 国なれど
何かを求め 胸弾ませて

テイクオフ 締めるベルトに 身をゆだね
帰ることない 世界が消える

朝日を見 夕日を見ては 雲のなか
エアクラフトの 凜々しさ恋し

（二〇二四年十一月七日）

4 4. テーマ〔数字を入れる〕

山奥で 手七場六の 声あらば
鹿のまなざし もみじに向かう

百曲り 峠を越えて 行く先は
天国地獄 果たして空か

西国に 流れ流れて 三日月の
地藏にかかり 観音にわぶ

（二〇二四年十一月四日）

4 5. テーマ〔架空の生き物〕

暖かい 土に生きるか 双頭の
蛇のもつ いま知り至りし 夫婦愛

天空に 稲妻の音 響かせて
登る定め 竜の足爪

幼児らが 河童に道を 尋ねれば
川底深く さらったとやら

（二〇二四年十一月二日）

46. テーマ [ごめんね／すみません]

すみません 言うも言わぬも そのままに
流れる水の 功罪何や

忍び足 ごめんね今日も 夜が更けて
寝顔見るなり 父親になる

すまないと 思うころと 裏腹に
森羅万象 殺生与奪

（二〇二四年一月二八日）

47. テーマ [胡桃（くるみ）]

テーブルに 飾ってみたい 小道具に
胡桃を選び いつしか悦に

胡桃割る 遊び心に 誘われて
開いたものの なかの実わずか

どんぐりも くるみも同じ 木の実なら
森にでかけて 熊になるべし

（二〇二四年一二月五日）

48. テーマ [恋]

遠くから 思いを込めて 手を振れば
舞い上がった 花びらの乱

聞こえたる あの方からの お手紙の
かそけき音に 胸震わせる

早く起き 門に立ちたる そのときに
声なくしても 空気伝わる

（二〇二四年一二月一二日）

49. テーマ [プレゼント]

プレゼント 添える手紙と お礼文
贈り贈られ 文字を楽しむ

異国より 届けられたる プレゼント
包み紙にも その地の香り

目が覚めて 見ればひと箱 枕元
誰が置いたか 人影はなし

（二〇二四年一二月一九日）

50. テーマ [おつかれさま／ごくろうさま]

いついつも おつかれさまの 言葉借り
感謝の気持ち そっと伝える

今日もまた おつかれさまと いいながら
台所から 玄関にゆく

玄関で 郵便ですの 声あると
ごくろうさまと 走って返す

（二〇二四年一二月二六日）

自主詠歌 01. わが高群逸枝に捧げる歌

漂泊に いざ白色の われを詠む
白骨と化す 明日待たずして

野にいでて 風とたわむれ 花を摘む
いざ月昇る 秋の夕暮れ

野の乙女 愛の誠は あの太古
思いに遺る 体に宿る

（二〇二四年一二月三一日）

自主詠詩 01. わが高群逸枝に捧げる詩

父母弟妹と古里に
貧しさゆえに別れを告げ
あすのわが身は白骨なるも
おのれの天才ただひたすらに
信じて往かんああこのときぞ

夫を残してわが身のみ
いま許されて旅に出る
遠くに見える木原山
白白白のその風受けて
いざ向かわんわが新天地

風が吹いたら吹き飛ばされ
雨が降ったらずぶ濡れに
曲従片手に酔いしれながら
ああ揺れて揺られて
わが道を往く

（二〇二四年一二月三一日）

第三編 昇る陽に（二〇二五年／令和七年）

01. テーマ [カレンダー]

お店より 師走にもらう カレンダー
表紙開ければ 新年登場

カレンダー 見るは祭日 連休の
並びの妙に 一喜一憂

カレンダー いよいよ来ました 最後の頁
落ち葉とともに 火の中に燃ゆ

（二〇二五年一月九日）

02. テーマ [日記]

隠したる 言うに言われぬ わがこころ
文字の力に 託しては泣く

ひらひらと かそけき風に 舞い落ちる
気持ち集めて 日記を埋める

過ぎ去りし かのとき書いた 日記帳
眺めてみては そこにいるわれ

（二〇二五年一月一六日）

03. テーマ [踊る]

聞こえる 音にあわせて 手をたたき
体揺らして 足動き出す

夏の日にはるか忘れし 思い出を
たどる手足と お囃子の音

北へ行く さすらい人の 子守歌
雪を払いて いざ口に出す

（二〇二五年一月二三日）

04. テーマ［おはよう／おやすみ］

太陽に 花瓶の花に 飼い犬に
朝と寝る前 ひと言交わす

おはようは 今日もいいこと あるように
おやすみで 明日への願い そっと告げ

まっすぐに 木立を抜けて 射し入りて
夕には丸く おやすみという

（二〇二五年一月三〇日）

05. テーマ［鍵］

鍵をかけ 「森の家」にて 籠城す
女性史に立つ 高群逸枝

難問を 解く鍵探す 受験生
射すか射さぬか 天啓の陽よ

大自然 忘備無防備 何たるか
鍵もつも生 鍵なくも生

（二〇二五年二月六日）

06. テーマ［春］

春の陽に 誘われ歩く 山道に
見知らぬ野草 人見知りする

ああ春の その春のなか 春ありて
爛漫のもと 団欒のとき

福寿草 次にタンポポ 菜の花の
野に一面の 黄色の世界

（二〇二五年二月一三日）

07. テーマ [雪]

暖かき 部屋から眺む 庭の雪
白の衣装に 綿の温もり

一夜明け 一面雪の その上に
一筋続く 足跡ありき

風しきる 白き舞にて 忘れ雪
これを最後と さよならをいう

（二〇二五年二月二〇日）

08. テーマ [ありがとう／うれしいです]

ありがとう なぜ言わないの 自分から
言えばここに 灯がともるのに

いただきが 見えてそのとき ありがとう
最後の一步 天辺に立つ

喜寿迎え うれしさ半ば 見上げれば
星が流れて いざ消えてゆく

（二〇二五年二月二七日）

09. テーマ [青空]

青空の 青は何色 問いにして
見上げる空の 青のまぶしさ

青空に 風船飛ばす そのときに
祈りも託し わが手離さむ

青空を かける白馬に またがった
自分を眺める 野に転がりて

（二〇二五年三月六日）

10. テーマ [物語]

物語 それを語らん その人の
物語見え 物語消ゆ

久々の あの物語 これもまた
思い出しては 草露に帰す

夕しぐれ 軒下に立って 物語る
名もないふたり 旅の行く末

（二〇二五年三月一三日）

11. テーマ [書く]

書いてみて はじめてわかる 人の世の
残忍さとか 傲慢さとか

ものを知り ものを書いても もの足りぬ
浮かんでは消ゆ 幻の詩よ

五〇年 いつしかわれも 物書きに
流れ流れて 行く先いずこ

（二〇二五年三月二〇日）

12. テーマ [さよなら／おげんきで]

さよならと 告げる言葉の その陰で
いつか会えると 手を握りしむ

雨の日の さようであれば 今日限り
傘をささずに それぞれの道

年賀状 お元気ですか 尋ねしも
届く賀状も お元気ですか

（二〇二五年三月二七日）

13. テーマ無し

母を追い父親さえもいまはなし
叱られたこともありしが草の露
行きたしや望郷のあの父母の村
風に乗り聞こえし声は何という
叱られしいまは自由かかぐや姫
夫との一体の理想があればこそ
ああ孤独の自由を得ようぞいま
森の家の双頭蛇となり人を断つ

（二〇二五年四月三日）

14. テーマ [花]

咲く花に 染められ遠き 山肌を
眺むる吾は 独りなりけり

時過ぎて 風に誘われ 舞い散りし
花のいのちに 残り香を知る

はかなくも 散るを悟りて 咲く花の
いまを盛りに 人を照らす夜

（二〇二五年四月一〇日）

15. テーマ [四月]

寒さ過ぎ 時節の風に 誘われて
いまや四月と 人舞い踊る

変わらずに 咲く花に似て この四月
人が変わりて 景色が変わる

菜の花と タンポポの黄に 染まりし野
いのちの息吹 吾を励ます

（二〇二五年四月一七日）

16. テーマ [いのち]

ことごとく ふさがれていま いのちつき
生まれ変わりの 道どこにある

周りから 虐げられて 泣き崩れ
生き返りたい あの風に乗り

生き直し いよいよ決し 群れを避け
頼るはひとつ 己の身のみ

（二〇二五年四月二四日）

17. テーマ [私だけの発見]

見たことも 聞いたことさえ ないことを
われひとり知り ところに埋める

夕暮れに ひとり行く身の ひとりごと
いつしか闇が 飲み込む定め

たそがれに 名を呼びて 振り向けば
虚なる調べを ただわれ知れり

（二〇二五年五月一日）

18. テーマ [たからもの]

忘れざる 物も自然も 体さえ
消えてゆくなり かなたの果てに

惜しみなく 与えしあの日の あのことは
いま振り向けば 空にて虚なり

何もない 何ひとつない かの地平
たからものなど あるはずもない

（二〇二五年五月八日）

19. テーマ [散歩]

野草園 老いしわが身の 足取りも
朝露のなか ナメクジに似て

歩を緩め 人と交わせる あいさつの
その会話にも 緑染み入る

今日もまた 同じ散歩の そのあとに
足はそのまま 温泉に向く

（二〇二五年五月一五日）

20. テーマ [数や記号]

含まれる 記号の意味の 多様性
月には月の 星には星の

限りない 数の並びの 無限性
見果てぬ夢も 尽くせぬ文字も

数を見て 記号になびく その果ての
抽象のもつ 具象の輝き

（二〇二五年五月二二日）

21. テーマ [最初の記憶]

いまそこの 最後の記憶 砕け散り
向かうはひとつ 原初の記憶

その昔 この世が生まれ 刻まれし
青と緑の 歴源記憶

思い出も 落葉となりて 堆積し
語り出すのは 最初の記憶

（二〇二五年五月二九日）

22. テーマ無し

露に濡れ 輝く時の そのときの
ああ麗しき いのちの美園

雑草の 冷たき土の 合間から
まっすぐ伸びる 今日もまたあり

カッコーも ホーホケキョも 力なく
いつしか終わる 冷酷の春

（二〇二五年六月五日）

23. テーマ [道]

影法師 道なき道を 道として
歩いてみれば いつしか道に

世に迷い どこにあるかを 問われれば
ある道もあり ない道もある

大勢で 一緒に歩く 者あれば
虚しくわれと 進む孤の人

（二〇二五年七月一〇日）

24. テーマ [猫]

思い出は わが家に昔 ペルシャ猫
青い目をして 白毛を誇り

ある婦人 数匹の猫 友にして
言葉を交わし とともに遊びぬ

ふれあいの その極まりに 猫がいて
かわいくなでし 暖炉の前で

（二〇二五年七月一七日）

25. テーマ [宇宙]

夏の夜の 宇宙の果ての その先に
古代人見て われを眺むる

いまわれも 宇宙のなかの 一箇所に
生まれて生きし 時間を思う

かすかなる 鳥の響きに 虫の声
思えば宇宙 身の隣りにも

（二〇二五年七月二四日）

26. テーマ [怖かったこと]

絵空事 書いて楽しむ 人あれば
書かれて裂ける 生のころあり

道端に シカが飛び出し 接触し
屋根の上には サルの集団

キャンプ場 テントのなかに しみわたる
怪談話に 凍りつく夜

（二〇二五年七月三一日）

27. テーマ [夏]

夏のない 森のなかに たたずめば
嗚呼なつかしや まばゆき日差し

この年も 日差しのなかに 意を決し
過行く時を 思い切り抱く

春を見て 夏を踊りて 秋の空
向かうは例の 白き山肌

（二〇二五年八月七日）

28. テーマ [デザート]

デザートに プリンを食べて みましたよ
宇宙の果てに 着いたようです

さああなた あなたもどうぞ 召し上がれ
私がつくった デザートです

どうでしょう 今日のデザート いかがです
疲れをいやす 色と味です

（二〇二五年八月一四日）

29. テーマ [理科室]

おおそこは 宇宙がありて 化石あり
時間に触れて 空間を知る

恐竜も マンモスもまた 生きていた
過去にもどりて いまの小さき

絶滅の 危惧種調べて 人間の
愚かさ笑う 我も人間

（二〇二五年八月二一日）

30. テーマ [ついでしまった嘘]

きのうきょう 嘘も真も 生きるため
ネットのなかの 人のにぎわい

真実は 遠くかなたに 消えにけり
嘘の力に 押し流されて

何ゆえに 嘘をつくのか 調べれば
人間のなか 闇に隠るる

（二〇二五年八月二八日）

3 1. テーマ [音]

森の夜 テントに入って 寝ころべば
あるはいるはの 大音響

風強し 草がなびいて 木がすれて
傘宙に舞い わが身傾く

星屑の 数百万へ 深夜便
話し手独り 聞き手も独り

（二〇二五年九月一日）

3 2. テーマ [旅]

あてもない 迷いの旅の 道すがら
地に石ありて 天に星あり

旅人の ああ旅人の 行く先は
海底深い 暗闇の宮

旅にあり 生きるも死ぬも そのときは
風に吹かれて 雨に打たれん

（二〇二五年九月一八日）

3 3. テーマ [ちいさいもの]

生き物の いのちはすべて 同じなり
大なりに生き 小なりに死す

かに見ゆる 小さきものの 心意気
その大きさに 人は震える

いざ往かん 小さき力 引っ提げて
わが父となる いつか見る月

（二〇二五年九月二五日）

34. テーマ [昔の自分と話せるなら]

過ぎ去りし 過去の自分に 向き合って
この飯づくり あの本を読む

過去は過去 しかし過去にも いのちあり
訪ねてみると しみじみが寄す

わが昔 何も知らずに 生きていた
さりとて今は 何か知るかや

（二〇二五年一〇月二日）

35. テーマ [雲]

白雲を 越えて往かんか いまこの日
明日は漂泊 次は白骨

雲なれば 消えてゆくのも 道理なり
消えずに残る 未練と懷古

雲がゆく いずこへゆくか あの雲は
草木も知らず 人も尋ねず

（二〇二五年一〇月九日）

36. テーマ [家事]

梅の木を 愛でて水汲み 家事をして
仕事が終わる 妻を待つ夕

ああ太古 住みたる女 その人に
はやりの歌を 聞かせる男あり

何ゆえに 家事は女が するのかえ
このおもしろき われに給えあれ

（二〇二五年一〇月一六日）

37. テーマ〔気候／気象〕

天を見て 色を見るのは われのみか
銀の朝日に 沈む緋の射し

見上げたる 天の動きに 何を見る
いまは落雷 明日は大雨

昨今の 天の変動 地の動き
すべてにあるは 人の悪行

（二〇二五年一〇月二三日）

38. テーマ〔目覚めても忘れられない夢〕

目覚めても 忘れられない その夢は
語るもできず 隠すもできず

まどろめば 百年前の あの人に
会し語りし つかのまの恋

そのときが いつかは来ると 知りながら
今夜も行かん 夢のかなたへ

（二〇二五年一〇月三〇日）

39. テーマ〔固有名詞を入れる〕

おずおずと 名前を聞きし その方の
くれし名刺を 帯におさむる

野にあつて 名もない花も 生き物も
何も困らず みな生きている

価値は名に あらずと知るも 聞きたがる
それはだれなの それはなになの

（二〇二五年一一月六日）

40. テーマ [好きな色]

古糸の 色と色とを 組み合わせ
穴の靴下 繕うも良し

陽が射して 洗濯バサミ その色に
合わせて選ぶ 干し物眺む

眺むれば 森の自然の その色は
昨日を忘れ 今日に輝く

（二〇二五年十一月一日）

41. テーマ [人体]

人体の 模型居並ぶ 理科室の
虚構の姿 日常と化す

人体の 内臓描く 細密画
知識の欲望 感情を消す

ダ・ヴィンチの 「神の手」はいま 姿変え
手術を担う 「神の手」となる

（二〇二五年十一月二〇日）

42. テーマ [初恋]

初恋の 声かけられず 手紙書く
いつかふたりが 結ばれるよう

今日もまた みそめし人は 日傘さし
大人のような なり漂わす

しみじみと 思いめぐらせ 行き着くは
膨らみいずる ああ美なる夢

（二〇二五年十一月二七日）

43. テーマ [オノマトペを入れる]

ザーザーと 降りしきる雨 横目に見
スヤスヤと寝る わが子かわいし

思い切り ねじり鉢巻き わら草履
ドンドンピーヒャラ チンチンカン

オオと アアといおうが 時遅し
フラフラ倒れ エンエンと泣く

（二〇二五年一月一日）

44. テーマ [電話]

かけにけり 公衆電話 ありし日に
故郷の人に 愛する人に

電話番 同じ文句を 繰り返し
頭を下げて メモたたみけり

呼び鈴の その音色にも ときめかす
思いの色が 響き合いしも

（二〇二五年一月十八日）

45. テーマ [かたち]

この世から 色もかたちも なくなれば
何がわが目に 映るのだろう

影が揺れ かたちが融けて 地肌出る
なぜ影はある どう地肌ある

かたちある すべてのものが 溶解し
そのあとに来る かたちを見たい

（二〇二五年一月二十五日）

自主詠詩 02．わが高群逸枝に捧げる詩

夫との 一体の理想が あればこそ
ふたりして 孤独の自由を 得ようぞいま
行きたしや 望郷のあの父母の村へ

（二〇二五年一月三十一日）

自主詠詩 03．わが高群逸枝と石牟礼道子に捧げる詩

夫が用意し「森の家」
「古事記伝」ひとつを前にして
群れから離れ人を断ち
向かうは古代の闇のなか
鉾脈は有るや無しや知る人なし

定めし神代の天啓か
その日の勝利に胸躍る
母系制も招婿婚も
手にしたわが女性史学
ああ完成なるや

別れのときのそのときの
吐息のなかに神を見る
わが夫にすべてをゆだね
思いはひとつ「一体化」
ああこのいのち尽きにけり

ああ思えば七夕前夜の八代の宿
その日相まみえて幾十年
ふたりして重ねし愛のその誠
「全集」に編んで永遠に
いざ火の国の藤野と静子が待つ水俣へ

妻と帰ろ帰ろ
生まれ故郷の火の国へ
ここで墓建て守りをする
雑誌つくって偲ぼうぞ
水俣秋葉山風ばかり

何ゆえにわが夫婦を貶める
責めてくれるな妻だけは
何か悪事をしたのかい
妻にもわれにも人権あり
その尊さ文筆家知らず

狂気の祖母に酒乱の父
線路に散りしわが弟よ
吐血したこの魂をいかんせん
自分の死それとも死者への詩文なりや
教えてくれ誰か教えてくれ

ある日手にした「女性の歴史」
電流となってわが身を走る
誰の書かれし書なるや
会いたしその人に会いたし
わがいのちの生き返りをかけて

一九六六年六九歳の憲三と三九歳の道子
国鉄水俣駅のホームにふたり立ち
東京行きの急行「霧島」に乗り込むは
逸枝の靈魂宿るあの「森の家」へ向けての
生まれ変わりのための道行きなりや

私は彼女をどう讃美すべきか
言葉見つからず罪覚ゆ
私は彼女を受胎し
彼女は私を身に宿す
ああわが産室よ「森の家」

うつし世にわが母はあるけれど
生まれ変わりのそのときの
大妣君を慕いてわれ生きる
ああわれその夫を「最後の人」に
契るは残りの後半生

われ書かん「最後の人」を
雑誌に載せし幾年も
思えばいまは夢なりき
「寒椿が」この言葉を最後とし

ああ「最後の人」は隠れたる

典雅なるわが恩師
教えしことのその先に
愛あり苦あり死さえも
悪意に満ちたうつし世に
堪えて忍びて追慕する

いわずここまで秘しにける
わが思いの「最後の人」
齢八五歳のこのときに
語りて閉じるああ無常
いかんせんこの人生

愛し愛され散りゆく花が
独り静かに小舟に乗るも光る稲妻それを打つ
差し出す「最後の人」の手に
すがりて往くは^{おおははぎみ}大妣君の不知火海
天草灘^{うなぞこ}海底のああ^{おきのみや}〈沖宮〉

（二〇二五年一二月三一日）

第四編 沈む陽に（二〇二六年／令和八年）

01. テーマ [白]

白い帆に 白き風受け 走りゆく
葉山の海の スナイプの群れ

木原山 白白白の 風流れ
花を摘んだり 虫を採ったり

いよいよと 白装束に 身を包み
別れの歌に さくら舞い散る

（二〇二六年一月八日）

02. テーマ [朝]

夜が明けて 変わらぬ今日も 一筋の
光差し込む 木々のすき間に

一夜過ぎ 雨戸を開けて 見渡せば
白の世界に 点々の跡

根子岳を 真っ赤に染める 朝の陽に
言葉なくして カメラを向ける

（二〇二六年一月一五日）

03. テーマ [機械]

喜寿の歳 体も機械 それならば
いざ休もうぞ さあ明日のため

はからずも 時計止まりて あわてずに
電池を換えて 動き待つとき

夢うつつ 果たしてなるや 問いたです
機械が自然 自然が機械

（二〇二六年一月二二日）

04. テーマ [言えなかったこと]

思い出は 言うも言わぬも そのときの
とらわれし身の ああ無知無情

はかなくも 口に出そうが 閉じようが
いずれ後悔 身を重く打つ

勇気なく 言わずにしまう この思い
消えず流れず 闇玉手箱

（二〇二六年一月二九日）

05. テーマ [手]

言葉なく 手を差しのべて 求むれば
明日のわが身の 無なるに気づく

刻まれし わが手のしわに 問いかける
生きたあかしか それとも予告

手が動き 足が動いた きのうまで
思えばそれは 夢のからくり

（二〇二六年二月五日）

06. テーマ [街]

ひとつ三つ 街に灯りが ともるとき
山から眺め 人の香を知る

街は街 山は山なり 夜明け前
目覚めて今日も 陽のひかり抱く

街を出て 群れを断ち切り 森のなか
ひとり味わう 孤独の歓喜

（二〇二六年二月一二日）

07. テーマ [地球]

旅のなか 地球を知りて われを知る
わが身小さく 米粒もなし

地球儀を 回して遊ぶ この子らも
いつか知ろうぞ 殺戮の星

だれもみな 生まれしここは ひとつ星
愛しくもあり 苦界でもあり

（二〇二六年二月一九日）

08. テーマ [ふと立ち止まったこと]

自分から ふと立ち止まり 考える
これもよしかな それもまたよし

立ち止まる 暇があるなら もう一歩
いのちは待って 否くれません

そうはいえ 迷いの果てに 身を置くも
これも人間 休んで包め

（二〇二六年二月二六日）

09. テーマ [手]

手を見れば 己の過去の 品行が
刻まれている ようで怖い

寒空に 口も開かず 手も閉じて
無を友とする 路上者ありき

打つ手なし すべてをなくし うなだれて
それでも見える 地と水の彩

（二〇二六年三月五日）

10. テーマ [街]

久々に 街に下りて 買い物す
レジで一言 人の香を知る

山下に かすかに見える 街の灯を
手もとに集め 言問うてみる

街はまち 山はやまの そのいのち
絶えて久しい われ消ゆるのみ

（二〇二六年三月一二日）

11. テーマ [旅]

旅行けば 見知らぬ人の 声聞けり
西に何何 東はあれか

雨降れば さすらい人が 走り出す
どこへたどるか 行き先もなく

旅に出て 旅に疲れて わらじ切れ
にじむ血もよし また旅に出る

（二〇二六年四月九日）